

Title	731部隊による細菌戦と戦時・戦後医学
Sub Title	Germ-warfare by Unit 731 and medical ethics in Japan
Author	松村, 高夫(Matsumura, Takao)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.106, No.1 (2013. 4) ,p.31- 68
JaLC DOI	10.14991/001.20130401-0031
Abstract	<p>731部隊に所属した医者・高橋正彦と金子順一が戦後それぞれ慶應大学、東京大学に提出した医学博士論文を基礎にして、同部隊のペスト班責任者・高橋のもとで人体実験を行なって研究・開発されたペスト感染蚤が、実際に1940-42年に中国十数地域で散布され、多数の死者を出した実態を明らかにし、さらに戦後、731部隊・細菌戦に関連する資料が部隊幹部・医者の戦犯免責と引き換えにアメリカに提供され、高橋らが詳細な英文の報告書作成に協力した事実を明らかにする。そして、戦後日本の大学医学部が731部隊関係者に医学博士号を授与したことに象徴されるように、日本の医学界が731部隊への医者の関わりについて何ら自己批判せずに今日まできているその在りかたを問う。</p> <p>Based on the doctoral dissertation in medicine submitted to Keio University by Masahiko Takahashi and the University of Tokyo by Jun-ichi Kaneko, respectively (both former medical doctors of Unit 731), this study confirms the facts surrounding the development and research of plague infected fleas performed through human experimentation under the responsibility of Takahashi, the person in charge of the plague squad, and the actual scattering of the plague infected fleas (PX) in more than ten regions in China during the 1940–1942 period, resulting in a large number of deaths.</p> <p>In addition, this study confirms the cooperation by Takahashi in the preparation of a detailed report in English provided to the U.S. after the war of material related to germ warfare and Unit 731, in exchange for war trials immunity to Unit officers and doctors.</p> <p>Moreover, this study questions the very fact that the Japanese medical community can remain free from self-criticism up to now regarding the involvement of doctors with Unit 731 symbolized by the department of medicine at universities in post-war Japan that awarded doctor's degree in medicine to those involved in Unit 731.</p>
Notes	小特集：澤瀉久敬『医学概論』とその歴史的コンテクスト
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130401-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

731 部隊による細菌戦と戦時・戦後医学

Germ-warfare by Unit 731 and Medical Ethics in Japan

松村 高夫(Takao Matsumura)

731 部隊に所属した医者・高橋正彦と金子順一が戦後それぞれ慶應大学、東京大学に提出した医学博士論文を基礎にして、同部隊のペスト班責任者・高橋のもとで人体実験を行なって研究・開発されたペスト感染蚤が、実際に 1940-42 年に中国十数地域で散布され、多数の死者を出した実態を明らかにし、さらに戦後、731 部隊・細菌戦に関連する資料が部隊幹部・医者の戦犯免責と引き換えにアメリカに提供され、高橋らが詳細な英文の報告書作成に協力した事実を明らかにする。そして、戦後日本の大学医学部が 731 部隊関係者に医学博士号を授与したことに象徴されるように、日本の医学界が 731 部隊への医者の関わりについて何ら自己批判せずに今日まできているその在りかたを問う。

Abstract

Based on the doctoral dissertation in medicine submitted to Keio University by Masahiko Takahashi and the University of Tokyo by Jun-ichi Kaneko, respectively (both former medical doctors of Unit 731), this study confirms the facts surrounding the development and research of plague infected fleas performed through human experimentation under the responsibility of Takahashi, the person in charge of the plague squad, and the actual scattering of the plague infected fleas (PX) in more than ten regions in China during the 1940–1942 period, resulting in a large number of deaths. In addition, this study confirms the cooperation by Takahashi in the preparation of a detailed report in English provided to the U.S. after the war of material related to germ warfare and Unit 731, in exchange for war trials immunity to Unit officers and doctors. Moreover, this study questions the very fact that the Japanese medical community can remain free from self-criticism up to now regarding the involvement of doctors with Unit 731 symbolized by the department of medicine at universities in post-war Japan that awarded doctor's degree in medicine to those involved in Unit 731.

731 部隊による細菌戦と戦時・戦後医学

松 村 高 夫

要 旨

731 部隊に所属した医者・高橋正彦と金子順一が戦後それぞれ慶應大学、東京大学に提出した医学博士論文を基礎にして、同部隊のペスト班責任者・高橋のもとで人体実験を行なって研究・開発されたペスト感染蚤が、実際に 1940-42 年に中国十数地域で散布され、多数の死者を出した実態を明らかにし、さらに戦後、731 部隊・細菌戦に関連する資料が部隊幹部・医者の戦犯免責と引き換えにアメリカに提供され、高橋らが詳細な英文の報告書作成に協力した事実を明らかにする。そして、戦後日本の大学医学部が 731 部隊関係者に医学博士号を授与したことに象徴されるように、日本の医学界が 731 部隊への医者の関わりについて何ら自己批判せずに今日まできているその在りかたを問う。

キーワード

731 部隊、細菌戦、高橋正彦、金子順一、農安・新京ペスト流行、ヒル・レポート、ダグウェイ・レポート

はじめに

本稿では、関東軍防疫給水部（通称、731 部隊）に所属していた 2 人の医者・高橋正彦と金子順一が、戦後、医学博士号を各々慶應大学、東京大学から取得した提出論文を軸にして、戦争中の 731 部隊による細菌戦の研究と実施の実態を辿り、さらに 1945 年の日本敗戦以降、日本の医学界がいかなる問題を抱え込んだかを明らかにしたい。高橋と金子は 731 部隊で「エアゾール」(細菌の噴霧)の責任者として共同で研究し作業していた。⁽¹⁾ 731 部隊について多少とも知識をもつ者は、その戦後の医学界が抱え込んだ問題の一端が、大学が戦後金子・高橋両論文に医学博士号を授与したこと自

(1) ヒル・レポート (1947 年 12 月 12 日)「総論」は、「細菌戦に関してハルビンまたは日本で研究した以下の人たちを尋問した」として、「エアゾール 高橋正彦 金子順一」と記録している。松村高夫・金平茂紀「ヒル・レポート——731 部隊の人体実験に関するアメリカ側調査報告 (1947 年)」『三田学会雑誌』84 卷 2 号、1991 年 7 月、301-302 頁には、高橋正彦のエアゾールに関する尋問 (1947 年 11 月 20 日、英文) が掲載されている。フェル・レポート (総論) とヒル・レポート (総論) は、松村高夫編『〈論争〉731 部隊』増補版、晩聲社、1997 年に、資料 2、資料 1 として訳出されている。

体のなかに現われていることを感得するであろう。

一 金子順一・高橋正彦論文と農安・新京ペスト流行（1940年）

1. 金子論文の細菌戦データ

金子順一の博士論文⁽²⁾は、『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部に発表した以下の論文8点を合本したものであり、東京大学より1949年に医学博士号を授与されている。金子は、1936年東京帝国大学医学部を卒業し軍医となり、37年7月に関東軍防疫部員となり3年半勤務したのち帰国した。43年3月に軍医学校部員となり、同年4月には第九技術研究所員（登戸研究所）を兼任した。戦後、1950年9月から73年3月まで武田薬品工業に勤務し、山口県光工場などでワクチン製造に関わっている。

「雨下撒布ノ基礎的考察」『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部 第41号、1941年。

「低空雨下試験」『同』第1部 第42号、1943年。

「PXノ効果略算法」『同』第1部 第60号、1943年（Pはペスト菌、Xはケオプスネズミノミを意味する。したがってPXはペスト感染蚤のことである）。

「滴粒による紙上斑痕ニ就テ」『同』第1部 第62号、1944年。

「X. Cheopisノ落下状態ノ撮影」『同』第1部 第63号、1944年。

「シロネズミヨリ分離セル「ゲルトネル菌」ノ菌型」『同』第2部 第791号、1944年。

「X. 高空散布ニ於ケル算定地上濃度」『同』第1部 第81号、1944年。

「火薬力ニ依ル液ノ飛散状況」『同』第1部 第82号、1944年。

金子論文「PXノ効果略算法」に載っている表1「既往作戦効果概見表」には、合計6回、8カ所へのPX（ペスト感染蚤）の散布の実施日、攻撃目標地、使用したPXの重量、1次感染の死者数、2次感染の死者数などが記されている。

表1によると、1940年6月4日に農安 Nong an（吉林省）で5グラムのPXが地上で散布されたのに続いて、同年6月4日から7日にかけて農安・大賚 Nong an, Da lai の間の地域（吉林省）で10グラムのPXが地上で散布された。そして、同年10月4日に衢州（衢州）Ou xian（浙江省）にPX8キロが空中から散布され、10月27日には寧波 Ning bo（浙江省）に空中からPX2キロが散布された。さらに翌41年11月4日に常德（湖南省）に空中からPX1.6キロが散布され、翌年42

(2) 金子順一論文は、奈須重雄が2011年8月に国会図書館関西部で発見したもので、『朝日新聞』（2011年10月15日）、『東京新聞』（2011年10月16日）が報じている。金子論文については、渡辺延志「731部隊——埋もれていた細菌戦の研究報告」『世界』2012年5月号、および、波多野澄雄「新たな段階を迎えた細菌戦研究——『金子順一論文』が明かす『ホ号作戦』の実相」『季刊戦争責任研究』75号、2012年春季号が発表されている。

表 1 既往作戦効果概見表

攻撃	目標	PX (kg)	効果	
			1次	2次
1940.6.4	農安	0.005	8	607
1940.6.4～7	農安, 大賚	0.010	12	2424
1940.10.4	衢県	8.0	219	9060
1940.10.27	寧波	2.0	104	1450
1941.11.4	常德	1.6	310	2500
1942.8.19～21	広信, 広豊, 玉山	0.131	42	9210

備考：金子順一「PXノ効果略算法」『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部
第60号, 1943年より。

年8月19日から21日にかけて広信, 広豊, 玉山 Guang xin, Guang feng, Yu shan (江西省) にPX131グラムが地上で散布された。以上の6回の攻撃により, 1次感染者(罹患致死数)は合計695人, 2次感染者(罹患致死数)は合計2万5251人, 1次と2次の感染者合計は2万5946人とされている。

この表のなかで, PXの浙江省の衢県(衢州)と寧波, 湖南省の常德, および江西省の広信, 広豊, 玉山への散布については, 『戦争と疫病』などにより年月日も含めてかなりの程度明らかにされていた。⁽³⁾ただし, 散布されたPXの量については未知だった。また, 農安の1940年ペスト流行は, 新京ペスト流行との関連で重視され, 高橋論文にもとづいて研究されてきた。だが, 発生原因は不明であった。それが6月4日の農安に5グラムPX散布が原因であることが金子論文により初めて判明したのである。また, 農安・大賚にいたってはその間の地域(たとえば, 前郭旗)でペストが発生したことは部分的には知られてはいたが, 全体像は不明であり, それが6月4日から7日にかけてのPX散布によることも金子論文の発見で判明した新事実である。⁽⁴⁾

2. 高橋論文と農安・新京ペスト流行

高橋正彦の博士論文は,⁽⁵⁾『陸軍軍医学校防疫研究報告』第2部に発表した以下の論文を合本したものであり, 1949年に慶應大学に医学博士号請求論文として提出されている。

(3) 解学詩・郭洪茂・李力・松村高夫・江田いづみ・江田憲治『戦争と疫病——七三一部隊のもたらしたものの』本の友社, 1997年。細菌戦裁判キャンペーン委員会・ABC企画委員会『裁かれる細菌戦——資料集シリーズ』No.1-7は, 1997年8月に開始された細菌戦被害者訴訟の裁判における陳述書(篠塚良雄, 松本正一)と鑑定書(上田信, 吉見義明, 中村明子, 聶莉莉, 邸明軒, 黄可泰, 辛培林, 松村高夫, 近藤昭二)を掲載している。松村高夫・矢野久『裁判と歴史学——731細菌戦部隊を法廷からみる』現代書館, 2007年は, 裁判と歴史学との関連を731部隊と細菌戦の裁判での証言や鑑定書をとおして具体的に検討したものである。

(4) 農安, 農安・大賚, 新京の細菌戦については, 2012年7月27日-8月1日に実施された現地調査の報告が, 『731資料センター会報』5号, 2012年11月に掲載されている。

図1 中国東北部地区 (731部隊・細菌戦関連)

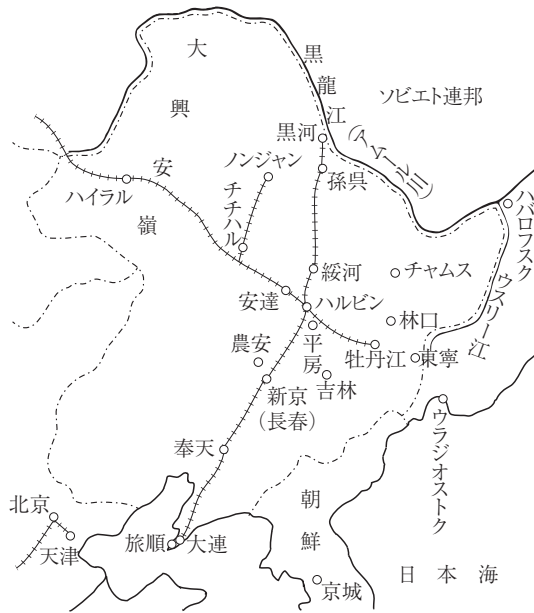
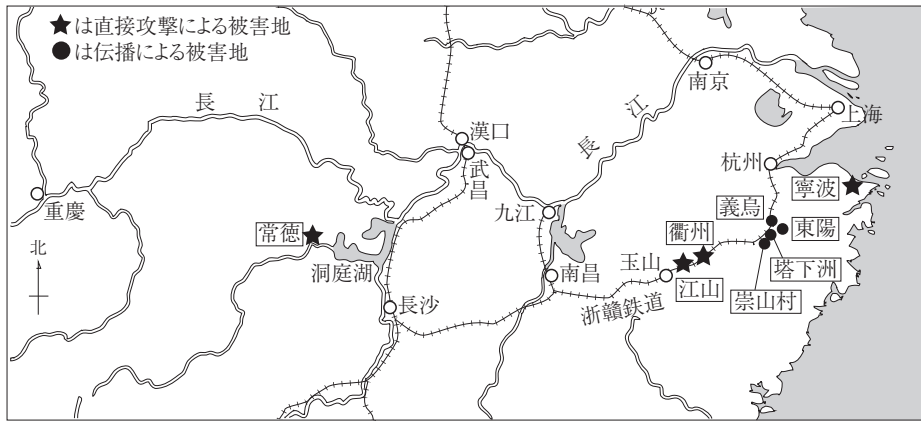


図2 中国細菌戦被害地地図



- (5) 高橋正彦論文は、松村高夫が1999年8月に慶應大学医学部倉庫で発見したもので、『朝日新聞』(2000年9月9日夕刊)が報じている。松村は、そのなかで「昭和15年農安及新京ニ発生セルペスト流行二就テ」第1編-第5編『陸軍軍医学校防疫研究報告』第2部 第514, 515, 525, 526, 537, 538号, 1943年の要約を、「『新京・農安ペスト流行』(1940年)と731部隊」(上)(下)『三田学会雑誌』95巻4号, 96巻3号, 2003年1月, 同年10月に発表している。その後、不二出版が復刻した『陸軍軍医学校防疫研究報告』第2部のなかの高橋論文も含まれている。

「昭和 15 年農安及新京ニ発生セルペスト流行ニ就テ」第 1 編-第 5 編『陸軍軍医学校防疫研究報告』第 2 部 第 514, 515, 525, 526, 537, 538 号, 1943 年 (以下, 「高橋論文」と略す)。
「ペスト菌ノ R 型変異ニ関スル研究」第 1 編-第 2 編『同上』第 2 部 第 461, 462 号, 1942 年。
「ペスト皮膚反応ニ就テ」『同上』第 2 部 第 381 号, 1942 年。
「「ペスト・ワクチン」ニ就テ (総説)」『同上』第 2 部 第 401 号, 1942 年。
「ペスト菌ノ「グリセリン」分解性ノ変異ニ関スル研究」『同上』第 2 部 第 484 号, 1942 年。
「ペスト菌ノ一変異株ニ就テ」『同上』第 2 部 第 496 号, 1943 年。
「ペスト菌ノ酸凝集性, 自然凝集性及「トリパフラビン」凝集性ニ就テ」『同上』第 2 部 第 495 号, 1943 年。
「瓜哇ニ於ケルペストノ疫学的観察」『同上』第 2 部 第 366 号, 1942 年。
「ペスト菌ノ「バクテリオファージ」ニ関スル研究」第 1 編-第 2 編『同上』第 2 部 第 472 号, 1942 年, 第 473 号, 1943 年。
「ペスト免疫ニ関スル研究」第 1 編-第 8 編『同上』第 2 部 第 402, 412, 421, 422, 432, 433, 442, 443 号, 1942 年。
「ペスト菌ノ非粘稠性変異ニ関スル研究」第 1 編-第 3 編『同上』第 2 部 第 411, 455, 456 号, 1942 年。

(1) 農安のペスト菌散布と流行

農安は, 当時戸数約 5600, 人口約 3 万 1000 の農産物の集散市場街であった。前述したように, 1940 年 6 月 4 日に地上で 5 グラムの PX が撒かれると, 農安の西大外にある農安医院の裏に住む陳滿弟が 6 月 17 日に死亡したことからペストの流行が始まった。陳をはじめその付近で急性疾患で死亡した 2, 3 人を診察した同医院の医者・李奎芳が, 6 月 30 日に発病し 7 月 2 日に死亡したが, 死因はペストによると推定された。つづいて 7 月 9 日に発病し 11 日に死亡した呉元林について菌検索した結果, ペストによることが確定された。以後ペストは, 農安医院から西門外, 東街, 南街へと次第に疫勢を強めながら農安县城全域に蔓延し, さらに周辺地域にも伝播した。同年 12 月 13 日に終息するまでペスト患者は 354 人 (死亡 298 人, 治癒 54 人, 入院継続 2 人) を数えている。農安县城人口に対して 1.5% の罹患率を示す「相当ニ激烈ナ流行」⁽⁶⁾であった。患者は 6 月に 4 人, 7 月に 54 人, 8 月に 167 人, 9 月に 98 人, 10 月に 86 人, 11 月に 10 人と推移している。「高橋論文」が, 農安において, 「ペスト患者ハ記録サレタモノ 353 名デアルケレドモ其ノ他ニ隠蔽サレタト考ヘラレルモノモ相当ニアルノデ實際ノ患者数ハ可ナリニ多イモノト思ハレル」⁽⁷⁾と書いたように, また, 満州国国立衛生技術廠長・安部俊男が「当局者が住民の人心を刺激しない程度の措置の下に探查し得た

(6) 「高橋論文」514 号, 2-5 頁。

(7) 「高橋論文」514 号, 17 頁。

密埋葬の数だけでも推定 100 を下らないのであって、…… 県城に発生せるペスト患者は決して 400 を降ることはあるまいと思はれる⁽⁸⁾』と書いたように、実際の死者は発表された 353 人を相当数超えたようである。

ここで注視すべきは、高橋正彦がはやくも 1940 年 7 月 2 日（李奎芳の死体から）と 7 月 15 日（氏名不明）に、農安の腺ペスト患者の腺種から菌株を分離していることである。高橋は 731 部隊が農安に PX を散布したことを知っていて、そのときか直後に農安に調査に入り、初期の患者から菌株を採取しているのである。「高橋論文」は農安では 2 年前の 1938 年に付近の部落に若干のペスト患者の発生を見たほかには県城内には前例がないので、「今次ノ農安ノペスト流行ハ原発性流行デアルト考ヘルコトガ出来ル」、「新シク病毒ガ輸入サレタメデアルト考ヘラレル、併シナガラ其ガ如何ニシテ輸入サレタモノデアルカハ全然不明デアル⁽⁹⁾』と書いていて、もちろん 731 部隊が農安に PX を撒いたとは書いていない。高橋は、農安へ伝播したのではなく、「原発性流行」であるとは書いてはいても、その「輸入」のしかたは不明であるとして、731 部隊の PX 散布は隠しているのである。

農安のペスト流行に対して、1940 年 7 月 12 日、満州国民生部衛生保健司は新京から防疫班を派遣した。農安到着の翌 13 日、農安県城では 5 つの大隔離区と十数個の小隔離区に区分した大規模な封鎖が実行された。隔離区の周囲は網と鉄条網で囲まれ、警官が銃をもって警備し、望楼より監視された住民は隔離区を離れることができなかった。40 年 8 月 14 日満州国民生部に出頭し「防疫委員章」をもらって新京を出発した原文二など 3 人の医学生は、汽車に 2 時間乗り農安に着いたが、そのときすでに死者は 120 人を突破していた。原は、「駅は 1 カ月以上もまるで廢墟そのものであり、「防疫本部は駅から近かった」「多くは死亡して本部にやっと通知されたので、寝棺を埋没する前に一応解剖し、脾臓、肺臓、リンパ腺を調べ、脾臓の切片やリンパ腺を取り、ガラス瓶に入れて持ち帰り、組織標本にそって確実な診断を下すことになっていた。……一日中 3 人も死体処理をしたら完全に心身を消耗させて終ふ」「9 月 1 日だったか新京から衛生技術廠の所員たち、新京医大の学生等を始め多人数が派遣されてきた。……かくて防疫陣は一段と強化され、その活躍も更に活発⁽¹⁰⁾ になった』と書いています。

(2) 新京のペスト流行と 731 防疫隊

農安に PX を散布した 731 部隊長・石井四郎にとって、ペストが農安から 60 キロほど離れた「満州国」の首都・新京（現在の長春）に伝播するのは予期せぬことだったろうが、その伝播は 1940 年

(8) 阿部俊男「新京に発生せるペストについて（1）大陸伝染病学会第 1 回総会特別報告」『日本医学及健康保険』3245 号，1941 年 8 月 9 日，7 頁。

(9) 「高橋論文」514 号，2-3 頁。

(10) 原文二（昭和 13 年度入学生）「昭和 15 年度夏期満鉄医院実習報告（6）満州国農安に於けるペスト防疫に参加して」『九大医報』15 卷 3 号，1941 年 3 月，93-98 頁（同論文は奈須重雄より提供された）。

9月下旬に起こった。以後、同年11月13日に終息するまで52日間にわたり、28人のペスト患者を出した。新京のペスト発祥地は東3条通の田島犬猫病院であり、患者はその近辺のいわゆる三角地域（南広場、東3条通、曙町、日本橋通）に局限されており、他の地域での患者発生は少なかった。「高橋論文」は直接の感染経路は不明であるとしながらも、農安のペストが何らかの経路で新京の三角地域に運ばれたと断定している。⁽¹¹⁾731部隊の医者・平沢正欣は、農安の富豪が犬を田島犬猫病院に入院させるために連れてきたときに、犬蚤をとおしてペストが新京に伝播したとしている。すなわち平沢は、「本研究ノ動機ハ新京ペストニ其ノ端ヲ発スルモノニシテ昭和15年9月下旬新京ペスト流行ニ際シ此ガ防疫ヲ命セラレ其レノ感染経路ノ究明ニ努メタリ 而シテ陸軍軍医学校防疫報告第2部第514号以下ニ於テ発表セラレタル如ク新京ペスト源泉ハ之ニ先行セル農安ペストナルコト明白ナリ 即チ新京特別市東三條通44番地田島犬猫病院ニ於テ初発患者ヲ出シ次イテ同家族及近隣ニ続発ヲ見タルハ一農安某富豪ガ同病院ニ入院セシメタル一飼犬ニ依リ流行地病蚤ヲ搬入セルモノニアラズヤト疑ヒ余ハ本発患者ガイヌノミニ依ルペスト感染ナラズヤト着目シ本事実ヲ実験的ニ証明セントセリ⁽¹²⁾」と書いている。

首都新京でペストが蔓延することをおそれた満州国警務機関、衛生機関、軍関係、満鉄、赤十字は、1940年10月1日に急遽防疫会議を開き、市防疫本部を設置した。⁽¹³⁾三角地域の交通を遮断し、同地域の消毒、鼠と蚤の駆除を試みたが、駆除は不成功に終わった。患者が真性ペストであるということが判明すると、関東軍司令官・梅津美治郎は、「関東軍防疫給水部長ハ速カニ所用ノ人材及材料ヲ以テ之ガ防疫ニ任ズベシ」とする関作命第699号（1940年10月5日）を下達し、それにもとづいて10月7日に731部隊（「加茂部隊」を名称に用いた）が、「関東軍臨時ペスト防疫隊」の名称で新京に公然と現われ、ペストの「爆発的流行」を阻止し「ペスト流行を絶滅させる」と宣言した。こうして10月10日以降、それまでの市防疫本部に代わって、本部長を石井四郎とする防疫隊本部が国防会館に置かれ、3階建の建物に「関東軍臨時ペスト防疫隊本部」の垂れ幕をさげた。ペスト防疫隊本部は、731部隊員を主体とし、それに満州の2、3の陸軍病院より派遣された軍医、衛生将校60人、

(11) 「高橋論文」515号、30頁；518号、7-8頁。

(12) 平沢正欣「『イヌノミ』 *Ctenocephalus canis* Curtis ノ「ペスト」媒介能力ニ就テノ実験的研究」の緒言。標題の下には、「満洲第七三一部隊（部隊長 陸軍軍医中將 石井四郎）陸軍軍医少佐 平沢正欣」とある。これは平沢が1945年に京都大学に提出した医学博士論文の主論文である。ほかに参考論文として、「飢餓蚤ノ能力ニ関スル研究」『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部 第64号、1944年；「傷害蚤ノ能力ニ関スル研究」『同』第1部 第65号、1944年；「撒布蚤ノ各種環境ニ於ケル生存期間ニ関スル研究」『同』第1部 第73号、1944年；「蚤飼育用鼠ノ運動制限ニ関スル研究」『同』第1部 第74号、1944年と、ペスト感染蚤の研究4点を提出している（平沢論文は奈須重雄より提供された）。平沢は1945年6月に飛行機事故で死去している。

(13) 新京・農安の731部隊による防疫活動については、中国・吉林省档案馆・日本近現代史研究会・日本ABC企画委員会編『「七三一部隊」罪行鉄証——特移扱・防疫文書編集』中国・吉林人民出版社（日本語版、中国語版）2003年が1次資料を復刻している。「資料 新京・農安ペスト流行「解説」」（松村高夫・江田いづみ執筆）は、『同書』455-468頁に収録されている。

衛生下士官 57 人、衛生兵 160 人、合計 277 人から成り、別働隊を含めると総計 729 人を数えた。連日、石井四郎の主宰で国防会館で防疫会議が開かれ、具体的な施策が検討され指示されたが、その会議には関東軍参謀部、関東憲兵隊司令部、新京憲兵隊、満州国総務局、新京市、警察、協和会、紅十字会、満鉄新京支社、新京駐屯軍など満州の権力機関が総動員されており、文字通り「軍ガ主体トナリ、軍官民ヲ一体トスル防疫態勢」⁽¹⁴⁾であった。こうした防疫態勢ができたことは、石井四郎にとっては願ってもないことだった。満州の権力機構の重要な一角を占めることができたからである。

別働隊の収容班は、患者あるいは患者嫌疑者を伝染病病院の千早病院か寛城子の臨時隔離所に収容して菌検査を行なった。病理解剖隊は解剖学的検査と病理組織学的検査を行なった。10月下旬には千早病院の解剖室も菌検査室も危険な状態になり、解剖には10月26日から馬疫研究所も使用されるようになった。だが、731部隊は10月下旬にまだペスト流行が終息していないにもかかわらず、撤退準備を宣言し、11月7日に撤退を決定した。それまでに満鉄が派遣した医者は145人、ほかに満州医科大学専門部の学生147人が防疫のために派遣された。⁽¹⁵⁾

1938年10月末少年隊員として731部隊に入隊し、39年7月に教育期間を終えて高橋班（ペスト班）に配属された鎌田信雄は、次のように証言している。「新京でペストが流行したとき、私たちは防疫のために出動しました。入船町を高さ3尺のトタン塀で取り囲み、火をつけて焼き払いました。ペストがそれ以上広がらないようにするためです。……そのときのことです。隊長の命令で、ペストで死んで埋められていた死体を掘り出して、肺や肝臓などを取り出して標本にし本部に持って帰ったこともありました。各車両部隊から使役に来ていた人たちに掘らせ、メスで死体の胸を割って肺、肝臓、腎臓を取ってシャーレの培地に塗る。明らかにペストにかかっているとわかる死体の臓器をまるまる持っていったこともあります。私にとっては、これが一番いやなことでした。人の墓をあばくのですから……。ここで採ったシャーレのペスト菌は、新京の国立衛生技術廠で培養されてオヤジ〔石井四郎〕のところ⁽¹⁶⁾に送られたわけです」。

(14) 「高橋論文」538号、2-13頁。

(15) 1937年に満州医科大学に入学し、北野政次の講義も聴いた小川武満（元平和遺族会会長）は、1940年の新京ペストの防疫に医学生として派遣された経験を、次のように語った（1995年7月31日、中国・ハルビンにおける解学詩、吉見義明、松村高夫による聞き取り）。

「新京に着いてみると、軍の命令により石井部隊長の指揮下に置かれていることがすぐ分かった。鼠が逃げないように動物病院の周囲を鉄板で囲う作業を学生は手伝わされた。囲った中の家を焼くのは目撃していないが、その作業のあと各戸を廻り身体検査をして、咳があったり熱があったり少しでもペストの疑いのある者は病院に連れていった。感染しても発症するのはその一部だった。公表された患者数より実際はもっと多かったのではないかと思う。感染するのではないかと、本当に怖かった。特に肺ペストは咳をするので怖かった。国防会館の大きな垂れ幕は憶えているが、あれはペストの恐ろしさを知らせる全市民に対する教育と総動員体制をとらせる意味があったと思う。医学生だったから石井を見たことはない。怪しい家は焼き、ペストで死ぬ者は死に、治る者は治り、一応おさまったので学生でもあるので瀋陽に帰った」。

(16) 731部隊研究会『細菌戦部隊』晩聲社、1996年、55-56頁。

(3) 731 防疫隊の農安への派遣

農安における 1940 年 7・8・9 月の防疫活動については前述したが、同年 10 月 7 日に新京に現われた 731 部隊は、新京のペスト流行の発生源を農安のペストと捉え、「農安近傍ノペスト病原ヲ一挙ニ掃蕩シテ国都新京ノペスト禍ヲ速ニ終息セシム」と主張し、40 年 10 月 20 日から 11 月 6 日まで関東軍臨時防疫隊農安派遣隊（「雁部隊」と称した）を農安に送った。新京のときと同様に、この農安防疫隊の派遣も関東軍司令官・梅津美治郎が下達した関作命第 380 号（1940 年 10 月 16 日）によるものであり、こうして 40 年 10 月 19 日から 20 日にかけて、新京から農安へ 3 本の専用列車が千数百人の防疫隊を運ぶことになった。このほか満鉄鉄道総局は関東軍参謀長の命令により、トラック 15 台と大型乗用車 10 台を防疫隊が使用するために提供した。10 月 20 日、「雁部隊」が農安に着いたときには、すでに農安県城の人口 3 万 3 千人（1940 年）のうち 3 分の 1 が逃亡していた⁽¹⁷⁾。大多数のペスト患者と死亡者は、防疫隊の到着以前に発生していたのである。じじつ、全期間の農安のペスト患者 294 人のうち、731 防疫隊が乗り込んできたときには、すでに 265 人が発病している。なぜ、6 月から農安でペストが流行して以降 4 ヶ月余、731 部隊は我れ関せずの態度をとり、流行がピークに達したあと、新京から「雁部隊」を農安に送ることになったのか。また、まだペストが終息していない 11 月 30 日、なぜ防疫隊は農安から撤退したのか。それは農安に出動したのは、患者を治療するためではなく、ペストに関するデータを得るためだったからである。高橋正彦が 6 月 4 日の農安での PX 散布のときか直後に農安に行き、7 月 2 日と 15 日に患者の死体からペスト菌株を分離したことは前述したが、その後も高橋はペスト菌株をさらに分離し取得しただけでなく、農安の菌保有鼠の移動を詳しく調査している。731 部隊にとってはペスト菌を散布し、その「効果」を調査するためには防疫してペスト流行が終息しては困るのである。9 月になって大規模な「雁部隊」が農安に行ったのも、731 部隊が新たなペスト菌株を得るだけでなく、ペスト発生と伝播のメカニズムを知るためでもあった。その目的は、PX の「効果」の拡大・強化にあったことはいうまでもない。

「高橋論文」によると、731 部隊は新京で 78 体、農安で 48 体のペスト死亡者を解剖し、ペスト菌検索を行なっている。死体から取り出した各臓器はプレパラートにして平房に持ち帰った。「屍体ノ全身解剖ヲ行ヒ淋巴腺、各内臓器及所要ノ箇所ニ就テ菌検索ヲ行ツタ」124 体のうち、検鏡試験、培養試験、動物試験、臓器熱沈降反応試験の結果、58 体がペストによる死亡と判明したとしている。また、病型別に臓器ごとに菌の検出率を観察している。さらに隔離病舎に収容された患者（新京 7 人、農安 9 人）からもペスト菌検出を行なっている⁽¹⁸⁾。

ペスト菌株については農安と新京で死体と患者の双方から 71 株を分離し培養している。ほかに鼠から 29 株など合計 110 株のペスト菌を分離・培養している。分離したペスト菌株 110 株について

(17) 前掲『戦争と疫病』、第 3 章「新京ペスト謀略——1940 年」（解学詩執筆）、100–110 頁。

(18) 「高橋論文」538 号、5 頁。

ては、一般の生物学的並びに血清学的性状を検査し、ペスト菌株 71 株の分離月日、氏名、性別、年齢、病名（腺ペスト、皮膚ペスト、ペスト敗血症、肺ペストなど）、経過、転帰（死体か生体か）、分離部位（脾、腺、肝、淋など）、普通寒天斜面、遠藤寒天平板上の集落、毒力試験について詳しいデータを作成している⁽¹⁹⁾。

「高橋論文」はまた、下水溝の蚤、鼠の有菌率を地域ごとに詳しく調べ、感染経路を探求し、ペスト発生と伝播のメカニズムを確定している。新京ではドブ鼠 1 万 3644 匹のうち 62 匹（0.5%）が有菌、他の鼠は無菌、農安では 325 匹のうち 9 匹（2.8%）が有菌であり、「ドブ鼠ノ間ノ病毒ガ人ペストノ直接ノ伝染元トナツタ」と結論づけている。すなわち、「高橋論文」は、ペストが人間にはドブ鼠の間に「有菌鼠ヨリ蚤ヲ介シテ人ニ伝播サレタモノ」であり、人から人への伝播は例外的と断定している⁽²⁰⁾のである。後述するように、この高橋の研究により、1941 年 11 月の常德への PX の投下が、40 年秋の衢州（衢州）や寧波への PX の投下よりより効果的に行なわれることになる。

以上、金子論文と高橋論文の内容を、1940 年の農安と新京のペスト流行との関連で辿ってきたが、次になすべき作業は、731 部隊による細菌戦実施と感染全体のなかで高橋正彦と金子順一が果たした役割を明らかにすることにより、全体のなかに高橋・金子両氏と彼らの論文を位置づけることであろう。そのためには 731 部隊における細菌研究・製造（特にペスト菌）、および細菌戦の実態（特に PX）を辿ることが必要であろう。さらに、戦後 731 部隊の幹部と医者が戦犯免責され、それと引き換えに人体実験を含む情報がアメリカに送られたが、そのなかで高橋がどのような役割を果たしたかを明らかにする必要があるだろう。そこで、次に 731 部隊について概観し、つづいて細菌戦の実態について述べよう。

二 731 部隊と細菌戦

1. 731 部隊による細菌兵器の研究・製造

日本は 1931 年 9 月 18 日に柳条湖事件を起こして中国東北 = 「満州」に侵略し、翌 32 年 3 月に傀儡国家・「満州国」をつくると、1932 年から 33 年にかけて、石井四郎はハルビン南東 70 キロの背陰河に防疫班（東郷部隊）を設け、細菌兵器の研究を開始した。ここで中国人に対する人体実験も始めている⁽²¹⁾。だが、34 年 9 月満月の宴のときに 16 名の収容者が脱走に成功し、そのなかの何人かが抗日連軍に参加し、防疫班内部の秘密が露呈したため急遽防疫班を閉鎖した⁽²²⁾。東郷部隊は一時東京に戻ったのち、ハルビン市南崗に移転した。37 年 7 月 7 日、北京郊外で起きた盧溝橋事件により

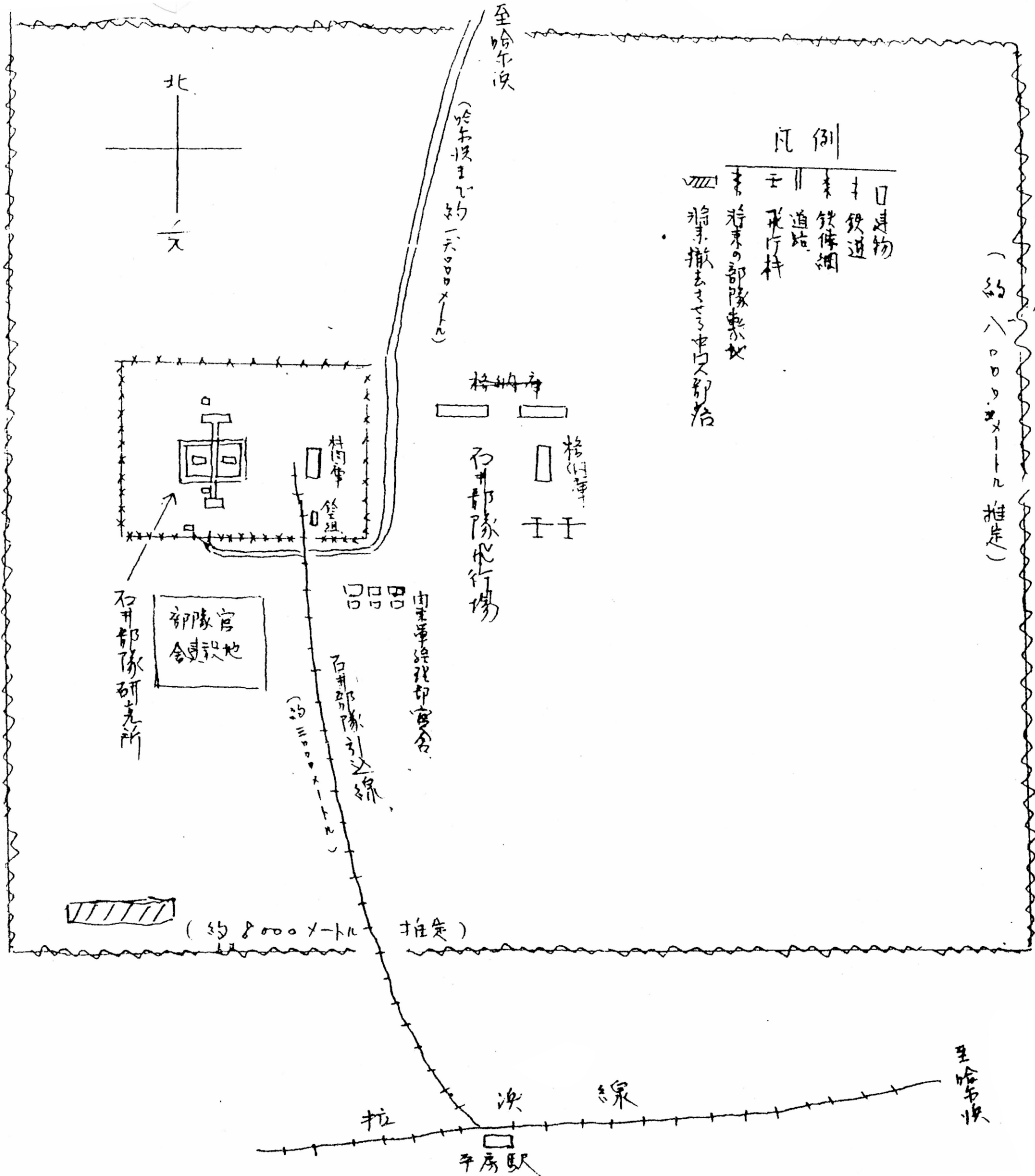
(19) 「高橋論文」537 号、2-7 頁。

(20) 同上、515 号、10-17 頁。

(21) 美馬聡昭『検証・中国における生体実験——東京帝大医学部の犯罪』桐書房、2013 年は、背陰河における BCG など抗結核菌の人体実験を分析している。

(22) 劉海濤「満州の状況に関する報告」（手稿）、1936 年 1 月。

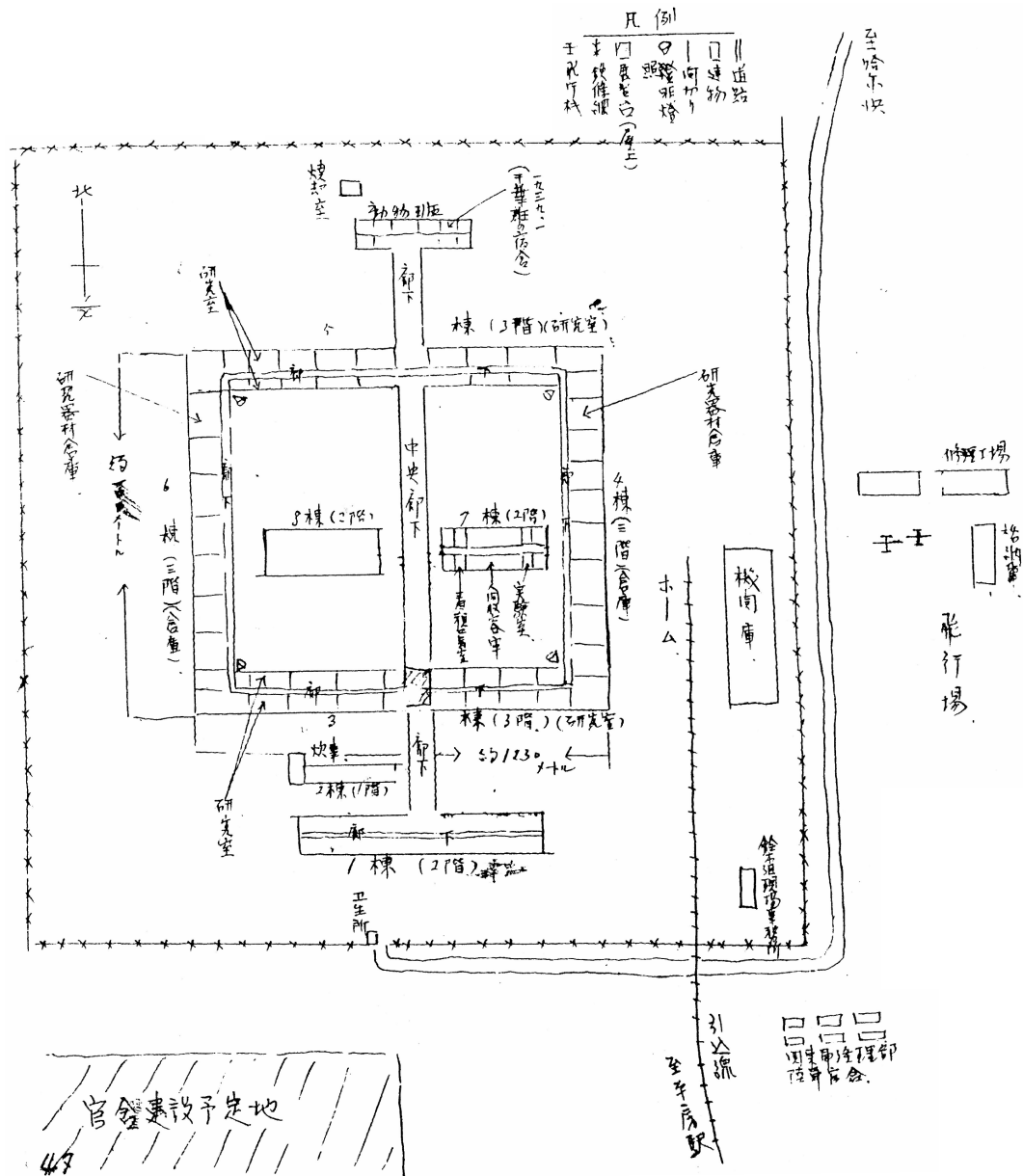
図3 石井部隊位置及建物略図 (1939.1 現在)



備考：図3，図4，図5，は，萩原英夫「暴露文」(注(27)を見よ)に付された図であり，萩原自身が描いたものである。

日中戦争が勃発すると，ハルビン南東12キロにある平房での関東軍防疫給水部（通称731部隊）の建設は急テンポですすめられた。外部からの不審者の侵入を阻止するため，地上の防衛線は3本敷かれ，空の防衛線は1本，不審な飛行機の進入には731部隊近くの8372部隊からの迎撃態勢がとられた。⁽²³⁾

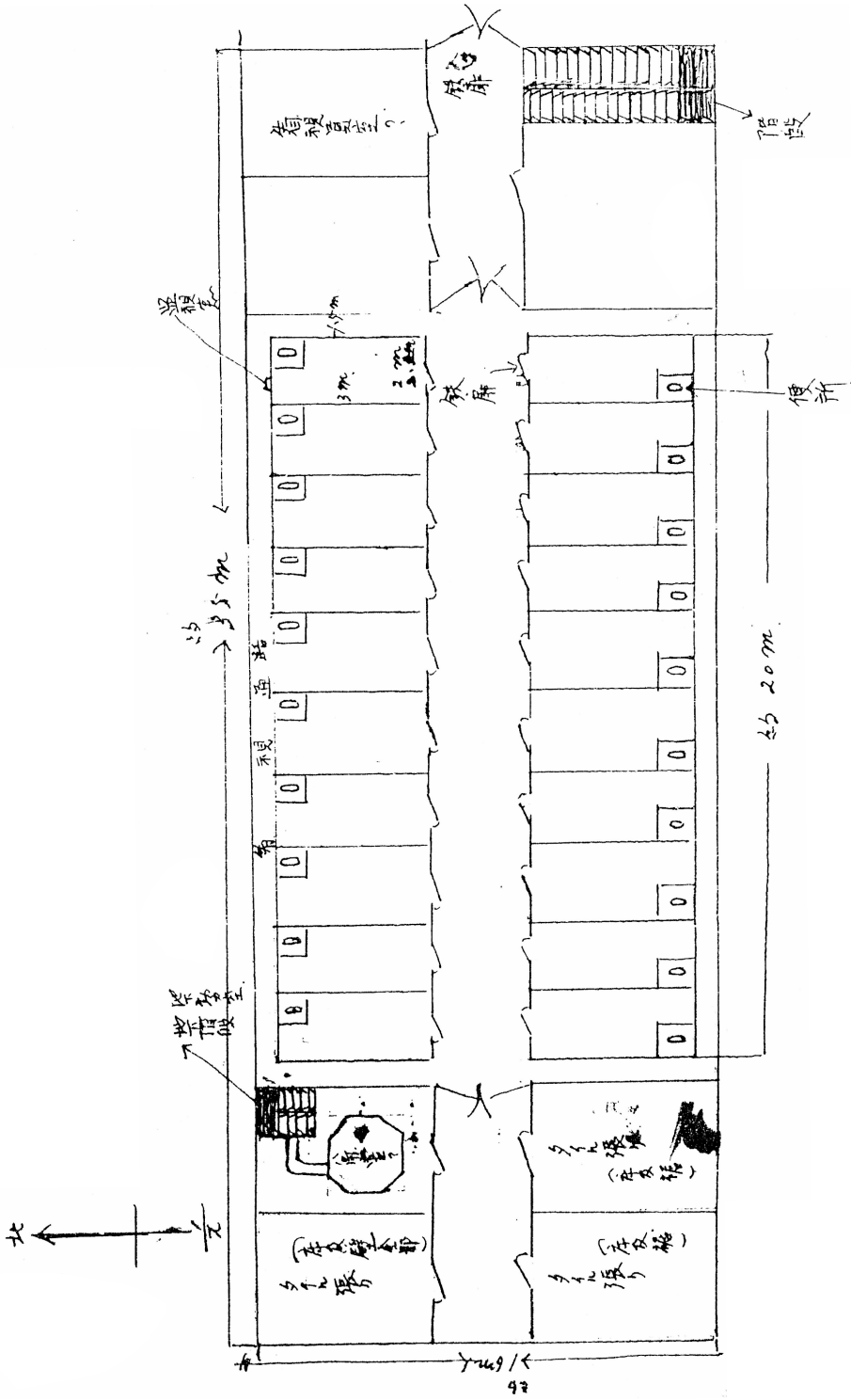
図4 石井部隊建物略図(平面図)(1939.1現在)



こうして満州の大平原に忽然と出現した100メートル四方、3階建の巨大ビルはロ号棟と呼ばれ、細菌の培養と製造のために冷暖房が完備されていた。ロ号棟の中庭には特殊監獄=7棟と8棟があり、この監獄は東西に35メートル、南北に16メートル、中央の廊下を挟んで20の獄房がある2

(23) 関成和著、松村高夫・江田いづみ・江田憲治編訳『731部隊がやってきた村——平房の社会史』こうち書房、2000年、37-53頁。

图 5 7·8 棟内部構造 (人間実験所)



階建てで、2つの監獄の収容人員は200-300人、最大400人の収容が可能だった。

ロ号棟のなかには、731部隊第1部・細菌研究部（部長は菊池齊）と第4部・細菌製造部（部長は川島清）があった。第1部は細菌別に分けられた十数班からなり、チフスの田部井和、コレラの湊正男、凍傷の吉村寿人、赤痢の江島真平、病理の岡本耕造、石川太刀雄丸、ウィルスの笠原四郎、結核の二木秀雄、炭疽の大田澄、天然痘の貴宝院秋雄などがそれぞれの班の班長だった。高橋正彦はペスト班の班長であった。第2部（部長は大田澄）は実戦研究を行なう部で、植物絶滅研究の八木沢行正、昆虫研究の田中英雄、航空班の増田美保はここに属していた。また、1943年には平房から120キロ離れた安達（アンダー）に野外の実験場をつくり、被験者を杭に縛り、飛行機からペスト菌弾や炭疽菌弾を投下・炸裂させ、感染効果を測定するような実験を行なった。第3部（部長は江口豊潔）は石井式濾水器を製造しており、細菌弾を入れる陶器製爆弾（宇治型爆弾）の容器も製造していた。第4部はワクチンや細菌を大量に製造し貯蔵した。ここには細菌の培養生産の柄沢十三夫、ペスト菌製造の野口圭一、脾脱疽菌製造の植村肇、乾燥菌・ワクチンの小滝秀雄などがいた。以上の4つの部のほかに教育部、総務部、資材部、診療部があった。

731部隊は表看板としては「防疫給水」を掲げていたが、実体は細菌戦のための研究・製造機関であり、人体実験も日常的に行なわれた。日本の植民地支配に抵抗した者、あるいは抵抗したとみなされた者が、「裁判ニ付サズ、事件送致セズ（「特移扱ニ関スル件通牒」1938年1月26日）」に関東憲兵隊によって組織的に731部隊の特殊監獄＝7棟・8棟に連行された。この特殊輸送のことを、当時の軍隊用語では「特移扱」と呼んでいた。ハルビン駅までは列車で憲兵が連行し、そのあと平房までは幌と鎖のついたトラックで運び、特殊監獄に収容した。その目的は人体実験である。黒龍江省档案館と吉林省档案館に所蔵されていた関東憲兵隊の「特移扱」の史料が1998年以降公開され、現在では約300名の犠牲者の名前、年齢、住所、容疑が判明し、地方の憲兵隊からハルビンの憲兵隊までの組織的な連行の過程も明らかになっている⁽²⁴⁾。

収容された中国人（ほかにロシア人、朝鮮人、モンゴル人などがいた）は名前を奪われて、3桁ないし4桁の番号を付され、「マルタ」（丸太）と呼ばれ1本2本と数えられた。医者にとっては生きてまま対象を実験できるということは魅力的に映り、まず石井四郎の出身校の京都帝国大学の医者が、続いて東京帝国大学、慶應大学の医者が平房に行った。人体実験の犠牲になった数は少なくとも3000人。平房では脱走の試みはあったが、成功した人は一人もおらず、全員が解剖台の上で殺されたのである。これがナチス・ドイツの強制収容所と違う点である。アウシュヴィッツなどでは解放され

(24) 中国・黒龍江省档案館、中国・黒龍江省人民対外友好協会、日本ABC企画委員会編『「七三一部隊」罪行鉄証——関東憲兵隊「特移扱」文書』中国・黒龍江人民出版社、2001年、および、前掲『「七三一部隊」罪行鉄証——特移扱・防疫文書編集』に、「特移扱」で平房に連行された者の氏名、年齢、住所、容疑などが記されている。元来これらの史料は日本敗戦時に証拠隠滅のために関東軍司令部前で焼却が試みられたが、焼却しきれず残存したものが後日発見され、2つの档案館に収められたものである。

たときにユダヤ人などの生存者がいたので、収容所内部の実態について証言を得ることができたが、731部隊では生存者は一人もおらず、ほとんどの医者は戦後口をつぐんで医学界に復帰したから、731部隊内部の事実は長い間隠されてきたのである。

人体実験では、細菌兵器開発や「軍陣医学」のためのさまざまな種類の実験が行なわれた。人間は水分をどのくらい抜いても生きられるか、低圧のなかに入れたらどうなるか、動物の血液と交換したらどうなるか、X線を長時間照射したらどうなるか等々の実験がなされた。

731部隊は細菌兵器として最も有効であるとみなしたペスト菌や炭疽菌について、噴霧実験、直接感染、免疫実験、爆弾実験を実施している。高橋正彦の行なった噴霧実験は、以下のようである⁽²⁵⁾。

菌名	実験回数	実験材料 (1回につき)
ペスト	4回	4-5人
炭疽	10	4-5 (2人のみ発病)
チフス	1	2
天然痘	1	1-2
馬脾痘	5-6	
結核	1-2	
赤痢	2-3	
ブルセラ	2-3	1-2
脾脱痘	2-3	1-2
コレラ	2-3	1-2
孫呉熱	2-3	1-2

この細菌噴霧のためのチェンバーは、口号棟中庭にある特殊監獄7棟・8棟のなかにある「八角堂」(従来、真空室といわれてきた)であるとほぼ断定しうる(図5を参照されたい。その図面をかいた萩原英夫は、八角堂を記憶しており、削った鉛筆の先のような形をしていた。もちろん何に使われるかは知らなかったと、生前筆者・松村に語ったことがある)。というのは、ヒル・レポートの各論の「エアゾール(噴霧)」のなかに、「人間の試験のために使用された八角形のチェンバー The octagonal shaped chamber used for human experimentation は、28立法メートルの容積があった。噴霧の発生にはフリット銃に似た防虫噴霧器が用いられた⁽²⁶⁾」との高橋正彦の尋問調書があるからである。であるならば、獄房から中央廊下に出て西方向の突き当たり近くの八角堂で各種細菌の噴霧実験を行っていたことになる。

この八角堂の記述はほとんど残されていない。ただ、特殊監獄(7棟・8棟)の建築に関わった萩原英夫が、戦後撫順戦犯管理所で書いた「暴露文」(1953年4月15日)のなかで以下のように記さ

(25) 注(1)の前掲松村・金平「ヒル・レポート」302頁に載っている高橋正彦のエアゾールに関する尋問(1947年11月20日、英文)である。

(26) 同上、301頁。

れている。

「私は1937年8、9月頃応募者20名と共に東京都牛込区軍医学校に於て受験（不合格者なく形式的受験）し1938年一行20名と共に渡満した。募集時は石井部隊軍属と云ふ契約であったが哈尔滨到着時20名は何れも鈴木組に引取られ作業現場平房到着後作業区処及金銭の受授関係は鈴木組との間に行はれ身分は石井部隊臨時傭人として取扱はれ食事及作業衣の支給、宿舎は陸軍官舎（後日部隊内起居）を当てがはれた。当時21才の私は常備日当は2円80銭で大工、左官は3円50銭-4円50銭、雑役夫2円80銭-3円20銭であり、私は雑役夫中の最低賃金であった。

当時の部隊は外郭建築が大体終り滅菌器、其他の研究器材がホームに山積し愈々内部設備に取か、らんとしていた時期であった。外郭建築は松村組がやったと聞いたが内部の機密業務、研究器材の運搬、開梱、設置、特に七、八棟（人間実験所）の内部諸建築と器材の設置は如何に安い労働力であらうとも中国人を充当することは出来なかつたのである。石井が同郷者である吾々を募集し此の作業に当てたのは自己の行ふ機密業務漏洩防止に第一義的意義のあることは明白である。

研究器材の発送所は日本特殊工業株式会社であり私が現地到着時特殊工業から派遣された者2、3名、現地で採用された者5、6名（何れも日本人）の一団があり7、8棟外の器材の組立取付け等は特殊工業の社員と協力して行った。

私達の主要な作業場所は人間実験所の7、8棟であり到着時は内部は入口及奥の方に若干の間切りがしてあつた丈で中間はまるで講堂の様に全く間切りがしてなかつた。7、8棟は3、4、5、6棟に囲まれ外部から全く見えず而も入口には嚴重な鉄の扉があり、3、4、5、6棟の3階の隅々には7、8棟に向けて照明燈が取付られていた。7、8棟を囲む3、4、5、6棟（煉瓦積）及3、5棟に通ずる廊下（四階）（煉瓦積）の裾約4メートルはセメント壁で塗られてあり3棟屋上には一段高い望楼があつた。

私達は現場到着時建設班の工藤技手より石井部隊長の命令として『七、八棟の内部工事を本年中（1938年）に終了すること、及業務については部隊内の人と雖絶対口外しないこと、若し口外した場合嚴罰に処す』の伝達があつた、……

第二梯団到着〔約40名が38年4月ごろ到着〕後請負制度を取りその為工事は比較的進捗した。7、8棟の一、二階の入口及奥の28ヶ室の壁塗り終了後中の空間の間切り、その為のベトン打ち等に着手した。此の工事に着手するまで嘗て五常に於て石井部隊に勤務した人々も7、8棟が何に使はれるかを知らなかつた様である。私も着手後2、3ヶ月後青柳より聞き知つた。之が即ち実験の為送られた人間を収容する牢である。此の牢は入口が鉄の扉で其他上下四面ベトン打ち、間口2.5メートル位奥行3メートル位でその牢は接続し内部に便所、床のみベトン打ちの上に板がはられてある。牢は一階丈で約20ヶ、私が帰郷した1939年1月には7、8棟の一階の牢約40ヶは完成し二階に着手した時期であつた（二階を一階と同様とすれば牢は約80ヶ）。

更に私達は奥の室（一階）に色々な器材（人間実験用？）を運搬し組立てた。特に印象に残っているのは八角堂（私達はそう呼んでいた）直径約 3.5 メートル位の八角の器材で内部の床及腰約 1 メートルはタイル張りである。各面には厚さ 1 厘位（40 厘平方）のガラス窓があり内部を見ることが出来る。事実不明なるも内部を真空にしたり空気を入れたりすることが出来ると聞いている。『八角堂』を取付けた階下は動力室であり 4.5 馬力の発動機があり直径 20 厘位の管が此の八角堂に接続している。奥 4 ヶ室は何れも床、腰共にタイル張りで南面の室には滅菌器を設置したと記憶している⁽²⁷⁾。

萩原英夫は 1939 年 1 月鈴木組より解雇され、軍隊に入るため一時帰郷している。この 7、8 棟の西側の 4 室で人体実験が行なわれた。タイルばりの 3 室は解剖室でもあり、八角堂は細菌噴霧室で被験者の状態は 40 センチ平方のガラス窓を通して観察していたと思われる。被験者を 7、8 棟の外に出してロ号棟のどこかで、あるいは他の場所で解剖したとは考えにくい。

1938 年から 4 年間、731 部隊・高橋班でペスト研究にたずさわった前出の鎌田信雄は、次のように語っている。「ペスト班の目的は、ペスト菌の濃度をどれだけ高めることができるかであった。濃度を高めるとは毒力を強化すると言いかえてもよい。そのために最も有効で、手っ取り早い方法は、生体（“マルタ”）を通すことだ。ラットやマウスよりはるかに有効な結果が得られた」「肺ペストまで感染させた“マルタ”の生体解剖に立ち会ったが、より濃度の高いペスト菌を取り出すことが目的だった⁽²⁸⁾」。

ペスト菌の「感染あるいは致死量」については、「MID50 は皮下注射では 10-6 ミリグラム、また経口感染では、0.1 グラムであることが判明した。菌を 5 ミリグラム / CC 含んだ空気を 10 秒間吸うと、80%が感染した⁽²⁹⁾」。フェル・レポートは、「直接感染」については、「潜伏期間は通常 3 日から 5 日で、死は発熱が始まってから 3 日から 7 日のうちに生じた。人工的にペストに感染させられ腺種⁽³⁰⁾ができて死亡した場合の多くは、死の 3 日前に肺炎を起こし、ついで高い感染力を示した」と記している。

このようなペスト菌感染患者の死にいたるまでの経過は、731 部隊診療部が観察し記録を残して

(27) 「暴露文 41 号室 70 番萩原英夫 1953 年 4 月 15 日筆述」（手稿）。この手稿には、「以下 16 葉の『暴露文』という文書は記載されている年月日に私自身の書いたものであり内容も真実であることを確認いたします。平成 3 年 9 月 8 日 千葉県香取郡多古町五反田 53 番地萩原秀雄」と記され、捺印されている。これは、家永教科書裁判において 1991 年 9 月 9 日に東京高裁に松村の「意見書」とともに提出された史料である。

(28) 1995 年 10 月、鎌田信雄（当時 72 歳）の森正孝による聞き取り。前掲『細菌戦部隊』、44-45 頁。731 部隊の雇員研究員だった上田弥太郎が、1943 年 5 月、731 部隊の 7 棟の一室で「昨日ペスト菌を体内に注入された中国人が今生命を奪われようとしている」のを目撃し、詳細に供述した「人間モルモット」と題する手稿が残されている。

(29) フェル・レポート、前掲訳書、291 頁。

(30) フェル・レポート、同上訳書、291 頁。

いる。診療部の「肺「ペスト」二例ニ就テ（抄録）」は、次のように記録している。

「第一例 二十七年ノ男子昭和十七年三月十七日夜半ヨリ悪寒戦慄ヲ伴ヒテ発熱四〇度ニ至ル初診三月十八日初診時三九・四度脈拍九五頭痛眩暈……翌日ニ至リ体温三八・六、脈拍一四四微細トナリ顔貌益々苦悶状ヲ呈シ胸部ノ疼痛ハ一増激シクナリ促進セル表在性胸式呼吸一分間七〇ニ達シ「チアノーゼ」右肺野一般ニ呼吸音気管枝性且鋭利トナリ右後下部摩擦音聴取セラレ発病後三日目ニ死亡ス……」

菌検索所見 喀痰及剖検材料ヨリ直接塗抹培養動物試験ノ結果「ペスト」菌陽性ト判定ス亦剖検材料（右肺）ニツキ実施セル熱沈降反応陽性ナリ

第二例 二十五年ノ男子昭和十七年五月二十三日ヨリ三七度前後微熱全身倦怠アリシガ二十五日夕刻ニ至リ悪寒ヲ伴ヒ体温四〇・五度ニ上昇頭痛眩暈右側胸部激痛アルヲ以テ受診ス……喀痰中両端膿染「ペスト」類似短桿菌ヲ殆ド純培養標本ヲ見ルガ如ク多数存ジタルヲ以テ前記ノ如キ処置並治療馬血清 100.0CC「ペスト」恢復患者血清 470CC ヲ数回ニ分チ筋肉内注射輸血等ヲ実施スルモ翌日ニ至リ顔貌苦悶状呼吸益々促進シ鼻翼呼吸トナリ胸痛激シクチアノーゼ著シクナリ遂ニ死亡ス……」

以上二例ニ於テハ意識ハ末期迄差程侵サレズ胸部ノ疼痛初ヨリ著明ニシテサラニ右側ノ疼痛ヲ訴ヘタリ胸部ノ所見ニ比シ心臓並血管ヲ急激ニ侵シ全身症状速ニ悪化スルタメニ血清其ノ他ノ注射剤モ効少く救命ハ極メテ困難ナリ末期ニ於テ骨髓並末梢血液中中性嗜好細胞ニ「ペスト」菌ノ存在セルヲ見特ニ骨髓中ニ於テ多シ⁽³¹⁾」。

野外の爆発実験については、ハバロフスク裁判において柄沢十三夫が、1944年春の安達におけるペスト菌実験で、柱に縛られた「被実験者カラ 10 米ノ所ニ試験管ガ置カレ、ソノ中ニペスト菌デ汚染サレタ液体ガ入ッテイマシタ。コノ試験管ハ爆発セシメラレマシタガ、私ノ知ッテイル所デハ、コノ実験ノ結果、感染ハ成功セズ、伝染病菌ハ呼吸器ヲ通ジテ浸透シナカッタコトガ明ラカニサレマシタ⁽³²⁾」と証言している。「爆弾実験」の結論は、「ペスト爆弾は不安定なので満足できる細菌兵器ではないが、蚤を使ってペストを流行させることははるかに実用的である⁽³³⁾」であった。そして、噴霧実験の結論として、「部屋の中に実験材料を閉じこめて行なっても、また低い高度で飛行機から噴霧した菌にさらしても共に極めて効果的だった。各種実験に使われた実験材料の 30% から 100% が感染し、死亡率は少なくとも 60% だった⁽³⁴⁾」。こうして液状のペスト菌は安定化しないので、ペスト菌を蚤に感染させる PX がつくられたのである。

(31) 「肺「ペスト」二例ニ就テ（抄録）」は陸軍の用紙に書かれた 4 頁の手稿である。冒頭には、陸軍軍医中佐 永山太郎、陸軍軍医少佐 池田苗夫、陸軍軍医中尉 村田武雄、同 吉野貴正の名前が記されている。731 部隊診療部（部長は永山太郎）による記録である。診療部は部隊員の診療だけでなく、人体実験も行っていた。注（74）の診療部による破傷風実験を見よ。

- (32) 柄沢十三夫の尋問（1949年12月26日）、『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』外国図書出版所（モスクワ）、1950年（以後、『ハバロフスク公判書類』と略す）、323頁。

このハバロフスク裁判を日本政府は、当時次のように捉えていた。

「細菌」裁判に関する断片的観察 1950. 3. 10

一. 本裁判は、冷戦当時より既に企図されていたのか、或は世界情勢就中米ソ冷戦の推移に応じて企図されたものか未だ不明であるが本裁判に関する其の基礎的調査が完成して概況を把握したのは、東京に於ける極東軍事裁判の開始より遥かに遅く（極東裁判の開始は二十一年五月三日、検事側証拠提出完了二十二年一月二十四日でその時ソ側は証書提出未完）二十二年の半頃以後ではなからうか、その理由は、本裁判の結果二十五年の刑に処せられた旧関東軍軍医部長軍医中將梶塚隆二及同じく二十五年の刑に処せられた旧関東軍第一方面軍軍医部長軍医少将川島清の両名がハバロフスクの将官ラーゲリより調査の為と称してモスクワに連行されたのが二十二年五月頃であった、（尚両名は二十四年十月下旬将官ラーゲリに戻り、十一月初旬未決監に入った模様）

本裁判に関する重要人物の一人として長期に亘る調査を受けた種村大佐がモスクワ近郊の国際ラーゲリに単身送られて本格的取調を受け初めたのが二十二年十二月三日であり、当時同ラーゲリには七三一部隊関係将官が若干既に収容されていた

二. 而して裁判の準備が全く完成したのは二十四年十一月中旬の様である、即ち、前記、梶塚、川島両被告が未決監に移されたのが二十四年十一月上旬であり、二十四年一月以来清水中將（裁判無関係）と共に第三分所に収容されていた山田乙三大将が消息を断ったのが（未決監に移されたものと判断される）同十一月上旬であり、又、各地区からハバロフスクに集められていた本裁判関係者（証人、容疑者等）の中主な者約百二、三十名が第二〇分所分遣隊（旧七分所、レーニン広場付近）に収容されたのが十一月初旬で、更にその中四十三名が出廷証人要員として同所に残され、他の者が十三分所に転出したのが十一月十三日で、翌十四日から之等四十三名は俄然優遇され出している、又十一月二十日に牧大佐が転出し三品大佐が転入した以外に移動はなくその中の十八名が結局出廷した、従ってソ連側が宣伝している様に（四八年二月上旬、イズヴェスチヤ）東京の極東軍事裁判において、北満鉄道買収問題及本件が却下されたのでソ連単独で裁判したといふ事は政治的含みを持った宣伝としか思へない

三. 裁判の状況は次の様である

- (1) 正式起訴状提出 二十四年十二月二十四日
- (2) 開廷 同 二十五日
- (3) 判決申渡 同 三十日
- (4) 証人出廷

検事側証人十八名は二十六日より二十九日の間処要に応じて出廷証言した模様

尚証人には二乃至三名につき一人の専属通訳がつけられ、証言が終れば退席

- (5) 裁判は公開にて、ハバロフスク旧市街内務省クラブに於いて行はれ、ソ連市民約一千名が傍聴した模様
 - (6) 被告十二名は清楚な軍服に階級章をつけて出廷、要図の様に右より階級順に夫々の升の中に着席
 - (7) 被告席の点滅ランプの赤ランプがつけば発言
- （以上の史料は、引揚援護局『自昭和二十四年至昭和三十一年 ソ連戦犯関係資料 二 引揚援護局等』（旧防衛庁戦史資料室所蔵）に収録されているものであるが、すべてを開示してはいない）。この史料は、日本政府が731部隊関係者がどう裁かれるか、ハバロフスク裁判を注視していたことを示している。

- (33) フェル・レポート、前掲訳書、292頁。

- (34) 同上、前掲訳書、292頁。

トに感染させる方法について多くの研究が行なわれた。何キログラムものふつうの蚤（1グラムで3000匹）の生産と、それに見合った感染の方法が開発された。この蚤の研究は詳細に記述されており、優れた研究であることを示している。ペスト蚤は最良の条件下では約30日間生存し、その間感染力があることが判明した。また、1人に蚤1匹が刺せばふつう感染することも判明した。1平方メートル当たり蚤が20匹いる部屋で実験材料を自由に動かしたところ、10人中6人が感染し、うち4人が死亡した⁽³⁵⁾。宇治型爆弾を使ったペスト菌の実験でも、「充填前に砂と混ぜられた蚤は10メートル平方の小屋で爆発させたところ、蚤の80%は生きており、そこに閉じ込められていた10人のうち8人が蚤に刺されて感染し、うち6人が死亡した⁽³⁶⁾」。

ペスト感染蚤を繁殖させる鼠の確保が重要となり、北京、南京、広東、シンガポールの各防疫給水部の指導のもとで中国各地で鼠が飼育された。日本では埼玉県春日部を中心とする地域の農家が鼠を飼育し、731部隊に送られた。

細菌製造を行なう第4部は1課から4課までであったが、第1課（培養生産）の課長は柄沢十三夫であり、ペスト菌と炭疽菌を製造していたのは野口圭一であった。植村肇班は脾臓疽菌を製造していた。その他コレラ菌、チフス菌、パラチフス菌、発疹チフスリケッチア、結核菌が製造された。第3課（乾燥菌・ワクチン）の課長は小滝秀雄であり、ペスト菌と炭疽菌の乾燥細菌を製造した。

第4部の細菌製造能力は、部長・川島清の証言によると、1ヶ月にペスト菌300キロ、チフス菌800-900キロ、炭疽菌500-700キロ、コレラ菌1トンである。柄沢の証言は「第4部ノ生産能力ヲ最大限ニ利用シタラ、最良ノ条件下に於テ、理論的ニハ」ペスト菌300キロまで製造できるとして⁽³⁷⁾おり、実際には10キロであったとしている。

炭疽菌については、1947年に大田澄を尋問した記録・ヒル・レポート（各論）によると、耳に注射、皮膚に塗布、皮下注射、経口、吸引と方法をさまざまに変え、炭疽菌の量を変えて投与している。耳への注射と皮膚塗布では感染しないが、皮下注射になると0.1ミリグラムで3人全員が感染し、次第に増量していき5ミリグラムでそのうち1人が死亡している。経口では50ミリグラムを10人に投与して1人が感染・死亡し、100ミリグラムを10人に投与して2人感染・死亡しているが、200ミリグラムを30人に与えると30人全員が死亡している。吸引では50ミリグラムを1人に与え死亡している。これで合計35人が炭疽菌の実験で死亡していることになる。これはヒル・レポートの総論の「炭疽」36例（うち適切な標本は31）に対応している⁽³⁸⁾。さらに炭疽菌の噴霧実験で

(35) 同上、前掲訳書、293頁。

(36) 同上、前掲訳書、293頁。ペスト感染蚤（PX）は731部隊の独自の発明であり、1942年から46年まで中英文化交流で中国に滞在していた生化学者・ジョセフ・ニーダム Joseph Needham に筆者がイギリス・ケンブリッジのニーダム研究所でインタビューしたとき（1992年3月）、当時91歳のニーダム（1994年に逝去）は、「生菌を空中から投下したばあい地上に着くまでに死滅するというのが当時の世界の生物学界の常識だった。ペスト感染蚤を投下することは予測できなかった」と語った。

(37) 柄沢十三夫の尋問（1949年12月26日）、『ハバロフスク公判書類』、319-320頁。

は、「10 立法メートルのガラス室に 4 人の人間を入れ、1 ミリグラム／CC 溶液 300CC をふつうの消毒用の噴霧器で噴霧した。粒子のサイズの測定はしなかったが、4 人のうち 2 人が皮膚に病巣ができ、そのためついに拡がって炭疽病になった⁽³⁹⁾」。これは前掲注 (25) に炭疽菌の噴霧により「2 名のみ発病」とあるのに対応している。

炭疽菌の野外実験については、1943 年末、安達で 10 人の被験者を 5 メートル間隔で柱に括りつけ 50 メートル離れたところから炭疽弾を爆発させ感染経過を観察した記録には、「私〔柄沢十三夫〕ハ、罹炭疽シタ被実験者ガ死亡シタコトヲ報告カラ知りマシタ」と記されている⁽⁴⁰⁾。

以上、ペスト菌と炭疽菌の人体実験について辿ってきたが、731 部隊が行なったその他破傷風菌⁽⁴¹⁾の実験、凍傷実験⁽⁴²⁾等々については、ここでは省略することにしよう。というのも、フェル・レポートが「結論」で明確に指摘したように、「一般的に、日本が研究した細菌戦用病原体のうち 2 種類だけが有効で、炭疽菌（主に家畜に対して有効と考えられた）とペスト菌だけだったと結論できる⁽⁴³⁾」からである。

2. 日本軍の細菌戦実施

(1) 細菌戦態勢の確立

平房の 731 部隊は、対ソ戦に備え 1940 年 12 月の軍令により 4 つの支部（牡丹江、林口、孫呉、ハイラル）を設立し、それに 5 番目の支部・大連衛生研究所を加えると 5 つの支部をもっていた。また、長春には 731 部隊の姉妹機関として関東軍軍馬防疫廠（通称 100 部隊）が設立された。そこは軍馬の防疫のための動物の細菌研究が中心だったが、人間に対する実験もなされた。

以上の平房を中心とした組織を支部まで含めてハルビンの防疫給水部と呼ぶとすると、このような防疫給水部は中国各地につくられた。1940 年までには北京に「甲」1855 部隊、南京に「榮」1644 部隊（多摩部隊）、広東に「波」8604 部隊ができ、それぞれが数支部から十数支部をもっていた。支部のなかには現地の陸軍病院、同仁会病院、満州医科大学と連携するものもあった。1941 年 12 月、日本が真珠湾攻撃と同時にインドシナ半島に侵略し、翌 42 年 2 月、シンガポールを占領すると、シンガポールにも南方軍防疫給水部（「岡」9420 部隊）が設置された。これらの部隊は、731 部隊が関東軍司令官の指揮下に置かれたように、それぞれ北京が北支那派遣軍、南京が中支那派遣軍、広東

(38) 大田澄の尋問記録、1947 年 11 月 24 日、ヒル・レポート各論。

(39) フェル・レポート、前掲訳書、290 頁。

(40) 柄沢十三夫の尋問（1949 年 12 月 26 日）、『ハバロフスク公判書類』、322 頁。

(41) 破傷風実験については、注 (74) を見よ。

(42) 凍傷実験は吉村寿人が指導し、酷寒の 11 月から 2 月まで「被実験者ヲ夜十一時頃、極寒ノ戸外ニ連レ出シ、冷水ノ入ツタ桶ニ両手ヲ入レサセ、其レカラ手ヲ出サセテ、濡手ノ俣、長時間寒気ニ立タセマシタ」（古都良雄の尋問（1949 年 12 月 28 日）、『ハバロフスク公判書類』、465 頁）。寒冷地での戦闘のさいの凍傷の予防、治療は、日本軍の「軍陣医学」にとって重要な課題であった。

(43) フェル・レポート、前掲訳書、297 頁。

が南支那派遣軍、シンガポールが南方派遣軍というような派遣軍の各司令官の指揮下に置かれた。731部隊（平房）から石井四郎をはじめとする医者がこれらの支部に指導に行き、また細菌戦実施のときには、731部隊は南京の1644部隊と人的・物的に連携して中国各地で細菌を散布した（後述）。シンガポールの部隊には、平房から内藤良一や貴宝院秋夫などが行き指導した。このように細菌戦態勢の形成・確立に石井四郎個人の果たした役割は確かに大きかったが、それ以上に、日本陸軍全体による細菌戦のための組織が網の目のようにできていたことに留意する必要がある。このような細菌戦態勢の下で、浙江、江西に対する細菌作戦（「ホ号作戦」）が始まるのである。

1940年6月5日、支那派遣軍作戦参謀総長・井本熊男は、参謀本部の作戦課員・荒尾興功などと打ち合わせ、7月中に浙贛沿線都市に対し、PXなどの細菌攻撃をすることを決定した。7月21日、井本はハルビンに飛んで「石井部隊ニ於テ『ホ』ノ件打合せ」をしたのち、翌22日杭州に飛んで視察し、731部隊員から編成される「奈良部隊」をハルビンから杭州の旧中央航空学校へ進駐させ、そこを細菌戦の前線基地とすることを決定した。石井は「奈良部隊」の編成に取りかかり、第2部部长・大田澄、航空班・増田美保など40人を選出した。「関作命丙第659号」（1940年7月25日）により奈良部隊と「秘密機材」の輸送が命じられ、40年7月末平房を出発し、8月5日に南京対岸の浦口に到着した⁽⁴⁴⁾。8月16日、支那派遣軍司令部から派遣された井本熊雄は、「奈良部隊」と細菌戦準備の連絡をとり、具体的な攻撃目標の搜索を指示した。井本は同月28日には東京に行き参謀本部の第1部部长・富永恭次、編成動員課編成班長・美山要蔵、作戦課作戦班員・荒尾興功と会い、30日には中支那防疫給水部の増田知貞と「奈良部隊」について連絡をとっている。このように、参謀本部、関東軍、支那派遣軍が一体となって細菌作戦を実施するのである。

細菌攻撃目標については、9月10日に「奈良部隊」の大田澄と増田美保から井本宛てに、「寧波ト衢県ハ目標トシテ適當ナルカ如シ（金華ハ？）」（「井本日記」1940年9月10日）と報告している。

（2）衢県への細菌散布

衢県は浙江省西部の衢州地区に位置し、浙江から江西につながる戦略上重要な地点で、水路交通が発達しており、1941年当時衢県県城の人口は3万5000人であった。日本軍が最初に攻撃したのは、1940年10月4日である。同日朝9時頃、「敵機一機が偵察旋回し、尾根をかすめて飛び去った。敵機が去ったのち、紫家巷一帯で麦、黒麦、粟、蚤が大量に発見された」。細菌散布の「17日後、衢県県城では大量の死んだ鼠が発見された」⁽⁴⁵⁾。同年11月上旬になると、日本軍がPXを散布した地点で、突然ヒトペストが爆発的流行を見せ、12月7日までの26日間に患者は25人となり、そのうち24人が死亡した⁽⁴⁶⁾（死亡率は96%）。

(44) 『ハバロフスク公判書類』、241-249頁。

(45) 衢州市衛生志弁公室「衢州鼠疫流行状況防治工作」、『衢州文史資料』第9輯、1991年12月、185頁。

1940年11月20日には県衛生院が患者診断から腺ペストと断定し、11月22日にはペスト防疫委員会が設置された。同日流行地区を封鎖するべく、警官が派遣された。12月7日を最後にペスト流行は一旦収まったかに見えたが、防疫委員会の決定により12月22日から24日の間に10戸37間が焼却された。しかし鼠類の間でペスト感染が広がっており、41年3月上旬、県城内で2次感染者が発生した。衛生署は同年6月、防疫のためポリツァーを派遣し、12月になってペストはようやく終息したが、41年に衢州県で発生したペスト患者は合計281人、うち死亡者は274人となった。⁽⁴⁷⁾

衢県でペストが流行中、日本軍の飛行機が県城を空襲したため、住民が周辺の農村に疎開し、ペスト患者も封鎖地区から逃げ出したため、ペストは近隣の農村に拡大した。衢州市衛生局の医者・邱明軒は、死者約1500人以上と推定している⁽⁴⁸⁾（金子論文では、衢県の1次感染は219人、2次感染は9060人である）。

(3) 寧波への細菌散布

衢県について日本軍機が1940年10月27日、寧波にPXを小麦の粒とともに投下した。寧波は浙江省東部の交通網の中心に位置する人口約26万の港湾都市であった。とくに日本軍が上海、広州を占領したのち、寧波は中国から海外に向けての数少ない海上ルートとなり、戦略的にきわめて重要な位置を占めていた。10月27日日本軍機は2回（午前6時47分と午後2時20分）当市に飛来した。当時寧波臨時防疫処の消毒隊副隊長・鐘輝は、「ペスト発生後、隔離病室の病人が語ったところでは、日本軍機が飛来したとき多くの麦と粟が一緒に落下し、飛び跳ねる小さなものもたくさんあった、という。その後、白色の防蚤服を着てリノリウムの長靴を履き、汚染地区で仕事をして出てくると、下半身にふつうより小さい真っ赤なノミが大量に這っていた。死者がいちばん多かったのは、麦がもっとも多く落下した家である」⁽⁴⁹⁾。寧波の宝昌祥号では14人、元泰紹酒店では6人死亡したが、この2軒は麦の落下がもっとも多かった。

1940年10月29日に最初の患者が発生し、2日後には死者がではじめた。衛生院は11月4日、検査の結果ペスト患者であると確認した。11月2日から、防疫措置がとられ、流行地域が封鎖され、6日臨時防疫処ができ、地区内に隔離病院が設置された。地域内の全家屋115戸が11月30日夜すべて焼き払われた。流行は12月2日に最後の患者が死亡するまで35日間つづき、死者の合計は109人であった⁽⁵⁰⁾（金子論文では、寧波の1次感染は104人、2次感染は1450人である）。

(46) 前掲『戦争と疫病』219頁の表5「1940年衢県ペスト死亡者名簿」による。

(47) 前掲『戦争と疫病』221-222頁の表7「浙江省ペスト流行統計（1938-50年）」による。

(48) 邱明軒「衢州鼠疫流行的断片回憶」1993年、および、邱明軒「浙江省における細菌戦被害の疫学的検証——衢州・江山の細菌戦被害——（鑑定書）」前掲『裁かれる細菌戦 資料集シリーズ』No.5, 2001年。

(49) 前掲『戦争と疫病』第4章「浙江・江西細菌作戦——1940-44年」（李力執筆），172頁。

(50) 同上，172-173頁。死者については、215-217頁の表3「1940年寧波ペスト死亡者名簿」による。

(4) 金華への細菌散布

つづいて同年 11 月 27・28 日に金華に日本軍機がペスト感染蚤 (PX) ではなく、ペスト生菌を投下した (それ故、金子論文の表 1「既往作戦効果概見表」には、金華は PX ではないので記されていない)。白い霧状に見える顆粒が日本軍機から散布されたが、それを福音病院に持ち込み検査したところ、顆粒内にグラム染色法により陰性桿菌が含まれているのが発見され、ペスト菌の疑いをもたれた。すぐに県政府と省衛生処に通報がいき、同月 29 日浙江省衛生試験所の呉昌豊が金華に到着した。翌 30 日衢県で防疫に協力していた浙江省衛生処処長・陳万里も金華に到着し、病院で再度この顆粒を検査した。呉が顆粒を麗水の省衛生試験所に持ち帰って培養したところ、繁殖能力は失っていたものの、金華上空から投下されたのはペスト菌であることが確認された。⁽⁵¹⁾ 注目すべきは、金華へのペスト菌投下は、生菌であったために地上に落下するまでにペスト菌が死滅し、ペストは流行しなかった、という点である。これは、1940 年 10、11 月に、寧波と衢県にはペスト感染蚤 (PX) を投下し、金華にはペスト生菌を投下して、両者の効果を比較するためだったと見て間違いのないだろう。その結果、731 部隊は、ペスト感染蚤 (PX) の効果に確信を得たのである。

(5) 常德への細菌散布

常德への PX の投下は、1941 年 11 月 4 日である。寧波、衢州では、飛行機から PX を穀物とともに散布したが、かなり拡散して地上に届いている。次の常德の投下 (1941 年 11 月 4 日) まで 1 年間の空白期間があるが、その間に新京・農安のペスト流行のさいに防疫隊が獲得した多数のペスト菌株の培養、ペスト菌に感染した臓器の分析を行ない、PX に確信をもって常德に投下したものと考えられる。常德では飛行機から PX を散布したさい、穀物や布なども一緒に投下したため、蚤が落下中に分散せずに地上に届いている。一緒に投下した穀物を地場の鼠が食べにきて、それにペスト感染蚤がたかり、感染した鼠と蚤を媒介としてペストがしだいに市全体に広がり人ペストが発症するというメカニズムは、高橋正彦による新京・農安のペスト流行調査で明らかになったことの応用である。40 年秋に浙江省で細菌を散布してから 1 年間、日本軍がどこにも細菌を散布した形跡がないのは、その間に 731 部隊本部 (平房) で農安・新京ペスト流行から得た菌株やデータを分析し、研究を重ねてより効果的な PX の製造と投下の方法を検討していたにちがいない。

井本日誌によると、井本熊雄は 1941 年 8 月 11 日に南京に到着し、杉本参謀の指示により、9 月 16 日に常德細菌散布の作戦発動を命じた。作戦指揮は、41 年 7 月に南京 1644 部隊長に着任したばかりの大田澄がとり、作戦参加者は約 100 人、うち 731 部隊からは 40-50 人であった。同年 11 月 4 日、731 部隊航空班・増田美保が 97 式軽爆撃機を操縦して常德に朝 6 時 50 分に到着した。井本日誌には、「霧深シ H [高度] ヲ落シテ搜索、H800 附近ニ層雲アリシ為 1000m 以下ニテ実施ス 増

(51) 金華への攻撃については、前掲『戦争と疫病』、182-183 頁を参照されたい。

田少佐操縦，片方ノ開函不十分，洞庭湖上ニ函ヲ落ス。アワ 36kg，其後島村參謀搜索シアリ⁽⁵²⁾』とある。アワはペスト感染蚤 = PX の符牒である。

川島清はハバロフスク裁判（1949年12月）で，大田大佐が「私ニ中国中部洞庭湖近辺ニアル常德附近一帯ニ飛行機カラ中国人ニ対シテペスト蚤ヲ投下シタ事ニツイテ語りマシタ。……其ノ後大田大佐ハ，私ノ臨席ノ下ニ第七三一部隊長石井ニ，常德市附近一帯ニ第七三一部隊ガ飛行機カラペスト蚤ヲ投下シタ事及ビ此ノ結果ペスト伝染病ガ發生シ，若干ノペスト患者ガ出タトイウ事ニ関シテ報告シマシタガ，……」⁽⁵³⁾と証言している。

こうして1941年11月4日早朝，日本軍機が一機，濃霧に包まれていた常德県城を低空飛行し，穀物，綿紙，生体不明な顆粒物を投下した。投下地点は県城の中心の関廟街，鷄鵝巷と東門付近であった。同日午後5時警報が解除されると，その投下物の一部は収集され，検査のために東門のはずれにある長老派宣教病院（広徳病院）に送られた。広徳病院の医者・譚学華と検査技師・汪正宇が顕微鏡で検査し，蚤は穀物からは見つからなかったが，穀物類のサンプルからつくられた塗沫標本から両端が着色したグラム陰性桿菌が見つかり，ペスト菌であることが判明した⁽⁵⁴⁾。翌5日朝，常德県衛生院，防護団，国民党軍警機関，広徳病院の会合が開かれ，その席上，譚学華は，ペスト菌が散布された疑いが極めて大きいので，防疫手段を直ちに取らなければならない，ペスト患者用の隔離病院も準備しなければならない，と進言した。ペストの専門家派遣を要請する電報が来陽省衛生処に打たれたが，初動防疫活動は遅れ，再度の要請により陳文貴⁽⁵⁵⁾が命を受けて湖南常德ペスト調査隊を組織し，貴州省貴陽を出発したのは11月20日，常德に到着したのは同月24日になった。

最初のペスト患者は投下地点の関廟街に住む12歳の少女・蔡桃児で，広徳病院に連れてこられたのが11月12日。発病から36時間後に死亡し，譚学華らが解剖した。13日と14日には3名のペスト患者が死亡し，死後解剖された。5番目の患者（莽玉貞）は13日に死亡した。この患者は生前に病院に運ばれたものではない。これは死亡した翌日の朝，紅十字の医者・H・ケント隊長が，棺を徳山（県城南6キロ）の路上で止め死因を尋ねたところ，ペストの疑いがあり，死体を解剖した結果，

(52) 井本日誌にある支那派遣軍參謀長・長尾正夫から井本宛報告（1941年11月25日付）。ほかの箇所でも井本日誌からの引用は，吉見義明・伊香俊哉『731部隊と天皇・陸軍中央』岩波書店，1995年によるものである。常德へのPX投下と影響全体については，前掲『戦争と疫病』第5章「湖南常德細菌作戦——1941年」（松村高夫執筆）を参照されたい。

(53) 川島清の尋問（1949年12月25日），『ハバロフスク公判書類』，308-309頁。

(54) 譚学華は，「湖南常德ペスト発見の経過」『湘雅医学院』1942年3月など4点の記録を残している。汪正宇は，「常德で最初の敵機投下物の検査経過」『医技通迅』1942年12月を残している。その日本語訳は前掲『論争』七三一部隊』（増補版）に収録されている。汪正宇の江田いづみによるインタビュー（1996年12月26日）も同書（増補版）に収録されている。

(55) 陳文貴は，1936年，国連衛生部の招きでインドのハッフキン研究所に赴きペストを研究した細菌学者であり，当時は中国軍政戦時衛生要員訓練総所検査学班主任であり，紅十字会総会救護総隊部検査医学指導員であった。一行はインドで使用されペスト特効薬として効果を挙げていたサルファチアゾールを携行して常德に着いた。

ペストと判明したものである。陳文貴一行が常德に到着した11月24日夜8時頃、6番目の患者が死亡した。翌日陳文貴が、東門外の地主・徐の家屋を改築した隔離病院でその死体を解剖し、細菌培養、動物接種などの実験を行ない、その結果、患者は真性腺ペストにかかり、ペスト菌による敗血症感染によって死亡したことが証明された。

陳文貴たちは40年12月2日に常德を離れ、同月6日に貴陽に戻り、12月12日付で「陳文貴報告書」⁽⁵⁶⁾を提出した。「陳文貴報告書」の結論は、1) 1941年11月11日から24日にかけて、常德では確かに腺ペストが流行した、2) ペストの伝染源は、敵機〔日本軍の飛行機〕が11月4日朝に投下したペスト伝染物体のなかのペスト伝染性をもつ蚤である、という2点に集約される。

陳がペスト流行は終焉したとみなして、12月2日に常德を離れたのは誤算であった。陳に代わって前出のポリツァーが常德に到着したのは、41年12月21日。ポリツァーは以後、約1年間常德にとどまり、献身的にペスト流行阻止のために活動をすることになる。ポリツァーは到着後すぐにペスト流行は日本軍による細菌散布が引き起こしたと確信し、12月30日には衛生处处长・金宝善宛に報告書を提出している。その「ポリツァー報告書」は明らかに「陳文貴報告書」を基礎とし、その内容も類似しているが、異なる点も加えられている。加えられたなかで重要な点は、ペストの直接感染経路の解明である。3つの感染経路のうち、PXと一緒に投下した穀物に誘われて鼠類が近づき、ペスト感染蚤が鼠に移り、鼠の間でペストを流行させ、それが人間に及ぶとして3つの経路のうち2番目の経路（陳報告では否定的に捉えられていた経路）の重要性を指摘し、それまで行なわれなかった鼠の保菌調査を行なった。その結果保菌鼠が多数発見され、その数は月を追って増加していったので、ポリツァーは2次感染が起こる危険性を指摘した。だが、何の対策もとられないうちに、翌42年3月末から2次感染が起こった。2次感染（42年3-7月）によるペスト死者は31人を数え、細菌投下後、⁽⁵⁷⁾流行終息までに1年間かかった。

常德の当時の公式の犠牲者は42人で、その氏名のリストが残っている。だが、この数値は病院や隔離病院で死亡した者のみのものであり、現実にはペスト患者の家はそれと分かると地方当局により焼かれるので、遺族はそれを恐れて密かに死者を埋葬したため、実際の犠牲者の数はそれよりはるかに多い。我々の現地調査でも、このリストとクロスする患者は少数であった。加えて、死者の

(56) 「陳文貴報告書」は朝鮮戦争時の細菌戦調査でニーダムが重視したもので、「ニーダム報告書」（正式な標題は、*Report of the International Scientific Committee for the Investigation of the Facts concerning Bacterial Warfare in Korea and China, 1952*）は、この「陳文貴報告書」を収録している（Appendix K）。ニーダムはピョンヤンにいた陳文貴に面会し、陳への聞き取りから日本軍による中国での細菌兵器使用と米軍による中国と朝鮮に対する細菌兵器使用との共通性の示唆を得ることになる。この点については、松村高夫「日中戦争期の日本軍による細菌戦と朝鮮戦争期の米軍による細菌戦の類似性・連続性について」『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』10巻2号、2010年6月を参照されたい。

(57) 王詩恒「常德におけるペストとその制御の諸方法に関する報告」、1942年7月20日。

出た家の家族は感染したまま周辺地域に逃げるため、2次・3次・多数次感染を引きおこした。最近の調査では、常德と近隣地域を含めると、犠牲者は7000人を超えている⁽⁵⁸⁾（金子論文では、常德の1次感染は310人、2次感染は2500人である）。

アメリカの「化学戦部」が1945年5月28・29日に常德を訪れ、41年の日本軍のペスト菌投下について調査し、調査団長・J・R・ギデスが「華中－湖南常德における日本の細菌兵器使用」と題する報告書を残している。ギデスは譚学華が「事実を調査した最初の人物であり、ペスト流行以前もその間もその後も常德に居住しており」、ペスト細菌散布に関する「第1次情報源」であるとして重視し、次のように記している。「1941年11月4日、常德に日本の飛行機一機が米穀類を投下したが、そのサンプルは収集され、病院でその医師〔譚学華〕が検査した。その米穀類からバクテリアが発見され、それは形態上はペスト菌に特徴的なものであり、着色も特徴的であった。数日以内に常德の鼠が多数死に、ペストの人間の症例が現れた。人間の犠牲者がペストによるものであるという完全な診断は、常德の長老派宣教病院で行なわれた。1941年以前に常德近隣でペストが発生したことはなかった⁽⁵⁹⁾。調査報告はつづけて、「米穀類の投下以前には当地でペストが発生していないこと、ペストに形態学上類似している細菌の表示、譚博士のペスト流行の予測と米穀類投下7日目後のペスト患者（複数）の出現、これらはその症例の信憑性を実証している。これは日本が細菌兵器を使用した、現在まで中国で得られた最強の証拠である。これは真実の症例であるように思われるが、おそらくは実験的施行（an experimental trial）であったろう。というのは、これらの戦術はその後観察されていないし、報告もされていないからである」と指摘し、「日本が1941年11月に常德でペスト菌を含んだ米穀類を使ってペストを拡大させた可能性は、きわめて大きいと信じられる⁽⁶⁰⁾」と結論している。

(6) 広信、広豊、玉山への細菌散布

最後に、1942年の江西省（広信、広豊、玉山）のPX散布について見ておこう。1942年4月18日、アメリカのB25爆撃機が東京・名古屋を初めて空襲したのに衝撃を受けた日本は、その飛行機が着陸した中国の浙江省内の航空基地を破壊し、さらに浙贛鉄道を打通するために、浙贛作戦（1942年

(58) 常德：侵華日軍七三一部隊細菌戦受害調査委員会『中国湖南常德侵華日軍731部隊細菌戦受害者及遺属名冊 第一冊（1998年12月）、第2冊（1999年11月4日）によると常德をその周辺のペスト犠牲者の合計は6491人である。第3次『被害者名簿』（2002年8月）では、犠牲者（死亡者）合計は7643人である。常德の細菌戦の被害については、聶莉莉『中国民衆の戦争記憶——日本軍の細菌戦による傷跡』明石書店、2006年を参照されたい。

(59) JJCA China Report (A Subject: Japanese Use of BW at CHAGTEH, Hunan Province), from J. R. Giddes to Harold Pride, 1945・6・28. 譚学華が検査した内容と米調査団に語った内容の詳細は、前掲松村「湖南常德細菌戦」、234-235頁を参照されたい。

(60) JJCA China Report, *op. cit.*

5月15日-9月末)を実施した。作戦開始とともに細菌戦実施の準備が始まり、5月27日の参謀本部での細菌作戦の打ち合わせには石井四郎、増田知真、村上隆、増田美保、小野寺義男が参加し、コレラ菌、チフス菌、パラチフス菌、ペスト菌が投下可能な菌であり、ペスト菌は平房に2キロ、南京に1キロ、その他に1キロ、計4キロあることが確認された。⁽⁶¹⁾5月30日には参謀本部に石井四郎、村上隆などが招集され、参謀本部第1部部长・田中新一より細菌戦実施に関する大陸指と注意事項が正式に伝達された。

ところが地上での細菌攻撃には、現地の支那派遣軍のなかで、味方の日本軍に被害が出るのではないかと懸念が表明された。総参謀長・後宮淳は日本軍兵士の被害を心配し、また実施部隊を指揮する第13軍司令官・沢田茂は当初細菌戦実施にやや消極的であった。沢田は『陣中記録』(1942年6月16日)に、「……辻中佐[当時参謀本部作戦課作戦班長・辻正信]の言によれば大本営は当方面に石井部隊の使用を考えあるが如し、反対なる旨開陳しおけり 日支關係に百年の痕を残す且つまた利益なく我方防疫の手續き丈も厄介なり 山中田舎の百姓を犠牲にして何の利益あらん……」⁽⁶²⁾とあり、さらに7月11日には、「石井少将連絡の為来著す 其の報告を聞きても余り効果を期待し得ざるが如し 効果なく弊害多き本作戦を何故続行せんとするや諒解に苦しむ 蓋し王者の戦をなせば可なり 何故こんな手段を執るや予には不可解なりされど既に命令を受けたる以上実施せざるべからず」⁽⁶³⁾と記している。

浙贛作戦開始後まもなく、義烏とその周辺地域は日本軍の支配下に入った。当時の義烏は衢県から伝染したペストが流行しており、その防疫活動の最中であつたが、日本軍の攻撃と占領により、防疫活動は中断せざるをえなくなった。当然、義烏におけるペスト流行は再び拡大した。⁽⁶⁴⁾6月に入ると第13軍の各部隊は、衢県(7日)、江山(11日)、玉山(12日)、広豊(14日)、上饒(広信)(24日)、麗水(24日)などを次々と攻略した。

浙贛鉄道打通後、42年8月19日以降、日本軍は計画通り、上饒(広信)(19日)、広豊(19日)、玉山(20日)、江山(21日)、常山(21日)から撤退し、衢県一帯に集結した。この移動を受けて731部隊は「ホ号作戦」を開始し、上記の地区に細菌を散布したのである。金子論文の「8月19-21日、広信、広豊、玉山、PX131グラム、1次感染42人、2次感染9210人」は、このときのPX地上散

(61) 井本日誌、前掲『七三一部隊と天皇・陸軍中央』、38-39頁。

(62) 沢田茂『陣中記録』は、森正孝・糟川良谷編『中国側資料731部隊——細菌攻撃は中国人民に何をもたらしたか』、第2章「浙贛作戦と細菌戦」(藤本治執筆)、232-234頁。

(63) 同上、234頁。

(64) 1941年9月2日、浙贛線の36歳の鉄道員・鄭冠明が衢県に出張中ペストに感染し、発病後の9月5日に列車で120キロほど離れた義烏県城北門街5号の自宅に戻り、翌6日に死亡した。1ヶ月後の10月6日、北門街一帯で続々とペスト患者が発生しはじめ、住民は流行地区外に逃れたため、ペストが急速に県城外で拡大した。42年2月になってようやく義烏県城地区のペストは抑制された。このときまでに義烏のペスト流行は死者215人を生み出した(『浙江省鼠疫流行史』、411頁、および、劉書臣「鼠疫流行義烏」『浙江文史資料』56輯、1995年、220頁)。

布である（他の種類の細菌散布は記されていない）。

さらに同年8月27日には、日本軍の衢県、麗水撤退に伴い、両地域で細菌を散布した。井本日誌（42年8月28日）に記載されている長尾参謀の「ホノ実施、現況」には、広信へはペスト（蚤、鼠）、広豊へはペスト（蚤）、玉山にはペスト（蚤、鼠、米にペスト乾燥菌を附着させ、鼠-蚤-人間の感染を狙う）、江山へはコレラ（井戸に直接入れる、食物に附着させる、果物に注射）、常山には江山と同じ方法、衢県と麗水にはチフスとペスト蚤」と解説しうる記述がある。⁽⁶⁶⁾

細菌戦が味方＝日本軍の被害をもたらすのではないかという懸念は、浙贛作戦の異常に多い戦病者となって現われている。同作戦全期間を通じた損害を見ると、戦死（含む戦病死）1284人、戦傷2767人に対して、戦病1万1812人と高い比率を占めるが、とくに第13軍の本隊が金華以北に撤退する過程で本格的な細菌戦を実施した浙贛作戦第4期（42年8月15日-9月30日）には、戦死77人、戦傷85人に対して、戦病は4709人を記録している。こうして作戦後半期（6月16日-9月30日）に戦病者の84.7%が集中する事態を生んだ（戦死者は同期に40.8%、戦傷者は同じく25.1%）。⁽⁶⁷⁾このように、浙贛作戦で多発した戦病者は、その多くが日本軍自らが実施した細菌戦の被害者だった可能性が大きい。⁽⁶⁸⁾それ以降、日本軍がPXを散布した形跡がないのは、日本軍に多数の犠牲者が出たことによるのだろう。

(65) 義烏県城のペストは一度終息したものの、1942年浙贛作戦による日本軍の義烏県城の占領により防疫活動が中断されると、ペスト流行は再び激しくなった。劉書臣「義烏鼠疫流行始末」（義烏県政秘書処編『文史資料通迅』第5期、1984年）を見ると、義烏県城から周辺の農村に次第に拡大していくことが分かる。崇山村・江湾一帯では、42年9月29日からペストが発生し、「現在も疫病の勢いは猖獗をきわめ、増加する一方で、一向に減らない。死亡者と合計すると300余人を下らない」と崇山村が属する仏堂区区長から義烏県長官宛に発信されている。南京の1644部隊の近喰秀大は臨時防疫隊を編成し、崇山村に赴き、死体解剖を行ない、「各臓器ごとに肝、脾剖面および血液などにより検査材料を撰取した」（近喰秀大「医学と心理学のかけ橋に関する回想」『防衛医学』19巻1号、1972年、上田信鑑定書、前掲『裁かれる細菌戦 資料集シリーズ』No.2、107-108頁）。崇山村は1942年11月18日に突然日本軍に包囲され、200余戸が焼かれ、12月になってようやくペストは終息した。崇山村では、住民1200余人の約3分の1に当たる396人が死亡した。結局、義烏県のペスト流行は1943年5月まで20ヶ月間におよび、政府の不完全な統計でも、613人が感染し、563人が死亡した（前掲『戦争と疫病』、187頁）。これは日本軍のPX投下による衢県流行が義烏へ伝播し、さらに義烏から崇山村など周辺地域へと2次、3次感染した例である。

(66) 井本日誌、前掲『七三一部隊と天皇・陸軍中央』、40-41頁。

(67) 防衛庁防衛研修所戦史部著『昭和17・8年の支那派遣軍』（戦史叢書55）朝雲出版社、1972年、264頁の表「わが損害」による。

三 731部隊・細菌戦と戦後日本の医学界

1. 戦後731部隊員のアメリカへの医学情報の提供

戦後1945年から47年にかけてアメリカは4回フォートデトリックなどの細菌戦専門家を日本に送り調査したが、いずれの調査もマッカーサーとウィロビーの全面的協力のもとで実施され、それぞれ調査報告書がペンタゴン宛に提出されている。すなわち、「サンダース・レポート」(1945年11月1日付)、「トンプソン・レポート」(1946年5月31日付)、「フェル・レポート」([総論]のみ、1947年6月20日付)、「ヒル・レポート」(1947年12月12日付)であり、フェル・レポート以外は、それぞれ総論と各論が残されている。最初の2つの調査(サンダースとトンプソン)では731部隊員は口裏をあわせて人体実験については供述しなかったため、人体実験のことは記されていない。人体実験のことが記されるようになったのは、フェルとヒルのレポートである。⁽⁶⁹⁾

サンダースとトンプソン調査団が収集した731部隊関連資料そのものは未だアメリカに送られてはいない。フェル調査団は47年4月に来日し、フェルとGHQ・G2のマックイル大佐が亀井貫一郎(4月24日)、大田澄(5月10日)、菊池斉(5月1・2・5日)、石井四郎(5月8・9日)など731部隊幹部を尋問したが、その背後では部隊幹部を戦犯免責する代わりに人体実験を含む細菌戦関連の1次資料をアメリカが根こそぎ入手する方針が決定される過程が進行していた。フェル・レポートがペンタゴンに提出されたのは47年6月20日であるが、731部隊の標本や印刷物などがG2のマックイル大佐により船積みされ、47年6月下旬には「⁽⁷⁰⁾非常によい状態で」アメリカに到着した。その標本作製にあたった日本人の病理学者を呼んで英文報告書を作成させている。フェル・レポートには、「細菌戦の各種病原体による200人以上の症例から作成された顕微鏡標本が約8000枚あり」その英文のレポートを作成中であると記されている。また、「中国の市民と兵士に対して12回の野

(68) 1644部隊の榛葉修は、1942年の6月から7月にかけて細菌(コレラ、チフス、ペスト、赤痢)を散布したが、その「散布地域は浙江省金華を中心とした一帯である。ところが結果は中国軍がすみやかに撤退したために、日本軍が散布地域に入ってしまう、休息、野営のさい付近の水を飲料水や調理用に使ったので、多くの伝染病患者が発生した。……その[細菌散布の]目的は、強毒病原菌を敵軍陣地後方に散布し、人為的に伝染病を猖獗させ、それで敵軍を毒殺し、その士気を失わせることであった。しかし、一般住民に対しても惨い結果をもたらしたという点で、非人道的行為であった。昭和18年9月、私が杭州陸軍病院に行ったとき、同病院は伝染病患者(日本軍兵士)でいっぱいだった。毎日数名が死んだ。聞くところでは、この年8月ごろ、同病院では庭にむしろを敷き、数千人の患者を収容したということである」(榛葉修自筆供述書(1946年4月17日)と記している。中国・中央档案馆・中国第二歴史档案馆・吉林省社会科学院編、江田いづみ・田中明他編訳『証言 細菌作戦——BC兵器の原点』同文館出版、1992年、68-69頁)。

(69) アメリカの1945-1947年の4次にわたる報告書については、森村誠一『新版・続 悪魔の飽食』改訂版、角川文庫、1991年に付された「解説」(松村高夫執筆)を参照されたい。

(70) 1947年6月24日付フェルから参謀副長宛文書。

外実験を行なった。その要約と関連した町村の地図が提出された」とあり、ペスト菌、炭疽菌、コレラ、馬鼻疽、流行性出血熱の人体実験データを得ていたことも記されている。

さらに第4次調査のヒル・レポート（1947年12月12日付）（総論）には、目的として、「A 細菌戦に関し日本側要員から提出された諸報告書を明確にするのに必要な追加情報を得るため B 細菌戦諸研究施設から日本に移送された人間の病理標本を調査するため C その病理標本の意義を理解するのに必要な説明文書を得るため」という3点が挙げられている。つまり、アメリカがすでに入手した病理標本の調査とそれに必要な説明文書を得ようとしたのである。そしてヒルは、エアゾール、炭疽、ボツリヌス、ブルセラ、コレラ、毒ガス除毒、赤痢、フグ毒、ガス壊疽、馬鼻疽、インフルエンザ、髄膜炎、粘素（ムチン）、ペスト、植物の病気、サルモネラ、孫呉熱、天然痘、破傷風、森林ダニ脳炎、ツツガムシ、結核、野兔病、腸チフス、発疹チフスごとに、ハルビンまたは日本で研究した医者を尋問している。本稿冒頭に記した高橋正彦と金子順一がエアゾールを担当していた記録は、ここに記されているものである。ペストは、石井四郎、石川太刀雄丸、高橋正彦、岡本耕造である、と記されている。そして病理標本として表2を掲げている。⁽⁷¹⁾

ヒルは、「結論」として次のように記している。

「この調査で収集された証拠は、この分野のこれまでに分かっていた諸側面を大いに補充し豊富にした。それは、日本の科学者が数百万ドルと長い歳月をかけて得たデータである。情報は特定の細菌の感染量で示されているこれらの疾病に対する人間の罹病性に関するものである。かような情報は我々自身の研究所では得ることができなかった。なぜなら、人間に対する実験には疑念があるからである。これらのデータは今日まで総額25万円で確保されたのであり、研究にかかった実際の費用に比べれば微々たる額である。

さらに、収集された病理標本はこれらの実験の内容を示す唯一の物的証拠である。この情報を自発的に提供した個人がそのことで当惑することのないよう、また、この情報が他人の手に入ることを防ぐために、あらゆる努力がなされるよう希望する。エドウィン・V・ヒル、M. D. 主任基礎科学、キャンプ・デトリック・メリーランド」⁽⁷²⁾

このように、驚くほど安価で入手した人体実験などにより得られた病理標本などのデータは、きわめて価値があるものなので、アメリカが独占すること、さらに、データを提供した日本人の医者がそれにより「当惑することのないよう」、つまり、提供したことを秘匿しておくようにとも指示している。そして、実際に戦犯免責された731部隊の医者は、戦後アメリカに情報提供などで協力したのである。

(71) ヒル・レポート、前掲訳書、279-280頁。

(72) 同上、281頁。

表2 病理標本

疾病	人間の事例・適切な標本	合計
炭疽	31	36
ボツリヌス	0	2
ブルセラ	1	3
一酸化炭素	0	1
コレラ	50	135
赤痢	12	21
馬鼻疽	20	22
髄膜炎	1	5
マスタードガス（イペリット）	16	16
腺ベスト	42	180
流行性ベスト	64	66
中毒	0	2
サルモネラ	11	14
孫呉熱	52	101
天然痘	2	4
連鎖状球菌	1	3
自殺	11	30
破傷風	14	32
森林ダニ脳炎	1	2
ツツガムシ	0	2
結核	41	82
腸チフス	22	63
発疹チフス	9	26
種痘	2	2

上の病理標本の表のなかで、すべての疾病の事例が判明しているわけではないが、このうち「マスタードガス（イペリット）16例（うち適切な標本16例）」とあるのは、「きい弾射撃ニ因ル皮膚障害並一般臨床的症狀観察」に記録されている被験者である。⁽⁷³⁾これは、1940年9月7日から10日にかけて実験された致死性イペリットガス弾を人間に向けて発射した実験（3地域、計16人）や、その16人のなかからさらにイペリットやルイサイトの水溶液を人間に飲ませた実験など5種類、計30例の実験結果をまとめたものである。野外の3地域に配置された16人のうち、15人の「被験者ノ症状及其後ノ経過」が20頁にわたって詳述されている。731部隊の診療部の池田苗夫たちが「経

(73) きい弾とは、イペリットガスのこと。「きい弾射撃ニ因ル……」（慶應大学図書館所蔵）は、児嶋俊郎により1983年秋、神田の古書店で発見されたもので、『毎日新聞』（1984年8月15・16日）が報じており、田中明・松村高夫編『七三一部隊作成資料』（十五年戦争極秘資料集、29）不二出版、1991年に収録されている。この報告書の表紙には、「加茂部隊」と印刷されている横に、毛筆で「池田少佐担当」と書かれている。池田苗夫は、731部隊診療課に所属していた軍医である。注（74）も見よ。

過」を観察したものであろう。報告書『きい弾射撃ニ因ル……』には死亡したとは記されていないが、ヒル・レポートにより、全員が死亡し解剖されて標本として日本に戻ってきたのち、戦後アメリカに送られたことが明らかになった。

また、破傷風 32 例（うち「適切な標本」14 例）は、「破傷風毒素並芽胞接種時ニ於ケル『筋肉クロナキシー』ニ就テ」⁽⁷⁴⁾に記録されている被験者 14 人と一致する。これは、14 人を対象として破傷風毒素と芽胞を被験者の足背部に摂取し、発症時の筋肉の電位変化を測定したもので、全員死亡したと記されている。

「高橋論文」を軸に辿ってきた本稿にとって極めて重要なのは、ベストである。ヒル・レポートには、「腺ベスト 180 例（うち適切な標本 42 例）、流行性ベスト 66 例（うち適切な標本 64 例）」とある。このなかの「流行性ベスト」66 例こそ、すでに詳述した 1940 年の新京・農安のベストで 731 部隊が獲得し、平房へ持ち帰った標本である。そして、ヒル・レポートは、「現在その標本の復元、標本の顕微鏡撮影、そして各標本の内容、実験上の説明、個別の病歴を示す、英文の完全なレポートを準備している」と記されているが、その「英文の完全なレポート」こそが、1991 年アメリカ・ユタ州のダグウェイ実験場で発見された「ダグウェイ文書」にほかならない。

「ダグウェイ文書」は、3 種類、すなわち、G 報告（馬鼻疽 glanders の報告）、A 報告（炭疽 anthrax の報告）、Q 報告（流行性ベスト plague epidemic の報告）である。この 3 種類のほかに未発見の報告書があるかといえば、まず無いといえるだろう。上の G、A、Q の 3 報告は、いずれも実戦上有効な兵器と考えられたので、それぞれ数百頁の詳しいものを作成したと考えられるからである。Q 報告は、プレパラートにもとづく人体臓器別図（臓器ごとの標本の顕微鏡カラー写真）が付された 700 頁以上の報告書であるが、そこに記されているのは 57 例である。この 57 例は、前述した新京・農安で 731 部隊が解剖した 124 体のうちベストで死亡したと認定した 57 体に対応している。そのなかで新京の患者の Q 報告にある英文の個人名イニシャルは、満鉄新京工事事務所『ベスト防疫作業報告書』1940 年にある新京市ベスト患者表の日本名のフルネームと一致する。英文報告書は、農安から新京にベストが侵入したとの見解を示しているが、これも、感染経路と伝染経路について「ベスト流行地域（農安方面）ヨリ直接ニ〔新京ノ〕三角地域ニ搬入セラレ」たとする前出の「高橋論文」によるものである。

高橋正彦が Q 報告作成に協力したことは、Q 報告の「緒言」に次のように記録されていることか

(74) 「破傷風毒素並芽胞摂取時ニ於ケル……」（慶應義塾大学メディアセンター所蔵）も、児嶋俊郎により神田の古書店で発見されたもので、『毎日新聞』（1984 年 8 月 15・16 日）が報じており、田中・松村編同上書に収録されている。破傷風菌の実験は 14 名を対象として破傷風毒素と芽胞を被験者の足背部に摂取し、発症時の筋肉の電位変化を測定したもので、全員死亡している。診療部の永山太郎部長、池田苗夫、荒木三郎がその実験記録の報告者として名前が記されている。

(75) 『戦争と疾病』第 3 章「新京のベスト謀略——1940 年」（解学詩執筆）144-145 頁。農安の犠牲者氏名は、現在一部しか分からないので、英文報告書とのすり合わせはできていない。

ら明らかである。「1943年 [1940年の誤り] 9月25日から11月7日まで私は2つの地域（満州の新京市と農安県）で流行性ペストを調査した。農安県は毎年流行性ペストで頻繁に汚染されていたが、反対に新京市は流行性ペストにより汚染されたことはなかった。1943年 [1940年の誤り] 6月に突然流行性ペストが何らかの方法で農安地方に起こった。これらの流行は次第に近隣地域に拡大し、ついに9月中ごろ何らかの伝達手段により新京に侵入し、ペスト病に対する十分な免疫がない市民のあいだに爆発的な流行を生じさせた。そして感染数日後、18人の患者全員が死亡した。

高橋博士たちは疫病学的および細菌学的調査を行なった。日本語で印刷されたそれらのレポートは1948年7月に既に米国陸軍に提出された。私たちは9月29日と11月5日の間にこれら2つの地域で死亡したすべての事例を解剖学的に研究した。私はこれらの結果を次の章で挿入するつもりである⁽⁷⁶⁾」。

以上、高橋を典型例として見てきたように、731部隊が取得した疫病学的病理標本などの1次資料は戦後アメリカが入手することになり、実戦上有効とみなされた細菌兵器（馬脾痘、炭疽、ペスト）は日本人医者の協力を得て英文化された。こうして、日本語の報告書よりはるかに詳細な分厚い報告書が作成されたのである。

2. 戦後日本医学界の731部隊と細菌戦に対する姿勢

高橋正彦や金子順一だけでなく、731部隊に関係した医者たちの多くは、戦犯免責され、しかもアメリカに協力したので、非難されることなしとして731部隊での研究報告を戦後博士号取得論文として提出した。『陸軍軍医学校防疫研究報告』第2部に論文掲載した者で、医学博士号の取得者だけでも表3のようである。

731部隊関係者は戦後医学界に復帰し、表4のような重要なポストを占めた。

戦犯免責された731部隊幹部の多くは自己批判することなしに、凍傷実験の吉村寿人が京都府立医科大学学長に、病理の岡本耕造が京都大学医学部部長、近畿大学医学部部長に、病理の石川太刀雄丸が金沢大学医学部部長というように、戦後医学界に復帰し、その中枢を占めた。

医薬業界では、731部隊の幹部内藤良一が1951年に北野政次や二木秀雄の協力を得て創業した「日本ブラッド・バンク」がその典型例であり、部隊が開発した乾燥血漿の技術を利用して朝鮮戦争時の米軍に売り込み、莫大な利潤を上げた。この会社は64年に「ミドリ十字」と改名し、翌年以降アメリカから大量の血漿を輸入したが、そのなかにHIV（エイズ・ウィルス）が混入しており、その結果血友病患者を中心に約2000人がHIVに感染させられたことは記憶に新しい。輸入血漿が危険なことを承知で加熱処理をせずに85年まで製造し投与しつづけた結果であるが、これは製薬会社、政府（厚生省）、国立予防衛生研究所（歴代の所長には731部隊の医者が多かった⁽⁷⁷⁾）が三位一体となっ

(76) The Report of “Q”, Forward (「ダグウェイ文書」のQ報告の諸言)。

表 3 731 部隊関連医師の医学博士号取得者

博士論文題名 (国会図書館関西館所蔵分), 学位は特記ない場合医学	学位大学, 年号
除菌濾過器主素材としての珪藻土に関する実験的研究	阪大, 1946 年
粘質ニ関スル細菌生物学的研究	京大, 1946 年
細菌の呼吸に対する阻害物質の影響に就て (独文)	北大, 1946 年理大
「マラリア」の発生と其の防遏に関する研究	京大, 1946 年
デフテリー菌並に毒素の Maus 脳内接種の研究	慶大, 1946 年
赤痢菌族の分類に就て	熊大, 1946 年
組織内に在るベスト菌染色法に関する研究	慶大, 1946 年
恙虫病に関する研究	新潟大, 1946 年
グリコール類の微生物学的応用	京大, 1946 年
「ケオプスネズミノミ」に関する実験的研究	東大, 1946 年
破傷風トキソイドの予防的効力について	熊大, 1946 年
武漢附近に於て分離せる「ゲルトネル」氏腸炎菌に就いて	京都府医大, 1947 年
臓器戦傷の後遺機能障碍について	東大, 1947 年
流猛性脳脊髄炎菌に関する研究	東北大, 1947 年
腸炎菌の菌株別による免疫	慶大, 1947 年
破傷風抗毒馬血清の製法	名大, 1947 年
腸チフス菌の変異について	慶大, 1947 年
B.C.G. に関する実験的研究	東北大, 1947 年
野兎病菌の培養に関する研究	慶大, 1947 年
青年期結核初感染に関する臨床的知見補遺	名大, 1948 年
脳脊髄液糖量の変化に関する研究	新潟大, 1949 年

備考：『陸軍軍医学校防疫研究報告』第 2 部に論文掲載した者で医学博士号を取得した者。

「戦争と医の倫理」の検証を進める会『パネル集 戦争と医の倫理』（2012 年），96 頁による。

た国家犯罪といわなければならない。

日本医師会は依然として 731 部隊や細菌戦に医者が関わったことを自己批判していないが、そのなかで 2009 年 9 月に『戦争と医の倫理』の検証を進める会⁽⁷⁸⁾が医者・医療関係者の全国組織として設立されたことの意義は大きい。その設立趣意書には、「最近の医学・医療の進歩発展は著しく、人類は新たな倫理的問題に直面しています。医学者・医師も自らの問題としてその解決を求められています。その取り組みに際しましては、医学・医療のこれまでの歩みを真摯に振り返ることは不可欠です。特に日本の場合、日本の医学会・医師会がかつての戦争に加担したことや日本の医学者・

(77) 国立予防衛生研究所の第 1 代所長・小林六造は防疫研究室；第 2 代所長・小島三郎はワクチン研究；第 4 代副所長・北岡正見は防疫研究室；第 6 代所長・福見秀雄は 1644 部隊；第 7 代所長・村田良介は 1644 部隊；ほかに、研究所所員の八木沢行正は植物研究班班長；江島真平は赤痢班班長；朝比奈正二郎は発疹チフス研究班；金子順一は防疫研究室などである（山口研一郎の調査による）。

(78) 「戦争と医の倫理」の検証を進める会編『パネル集 戦争と医の倫理——日本の医学者・医師の「15 年戦争」への加担と責任』2012 年，115 頁。

表 4 731 部隊関連医師の戦後のポジション

田中英雄	大阪市立大医学部長	戸田正三	金沢大学初代学長
田部井和	京大医学部, 兵庫医大教授	安東洪次	東大伝染病研究所, 武田薬品顧問
所安夫	東大病理学, 帝京大医学部教授	緒方富雄	東大医学部教授
内藤良一	ミドリ十字会長	岡本耕造	京大医学部長, 近畿大医学部長
中黒秀外之	陸上自衛隊衛生学校校長	小川透	名古屋市立大医学部教授
細谷省吾	東大伝染病研究所教授	笠原四郎	北里研究所病理部長
増田美保	防衛大学校教授	春日忠善	北里研究所
湊正男	京大医学部	北野政次	ミドリ十字取締役
村田良介	予研第 7 代所長	木村廉	名古屋市立大学学長
八木沢行正	日本抗生物質学術協議会常務理事	草味正夫	昭和薬科大学教授
山口一孝	国立衛生試験所	小島三郎	予研第 2 代所長
吉村寿人	京都府立医科大学長	正路倫之助	兵庫県立医科大学 (現神大医学部) 初代学長
石川太刀雄丸	金沢大医学部長	園口忠男	陸上自衛隊衛生学校, 熊本大
柳沢謙	予研第 5 代所長		
田宮猛雄	東大医学部長, 日本医学会会長, 日本医師会第 2 代会長		

備考: 表 3 同書, 87 頁による。予研とは国立予防衛生研究所のこと。

医師が戦争中に、731 部隊や戦地等で行った『人体実験』『生体解剖』『生体手術練習』、九大捕虜解剖事件等の非人道的行為について、自ら真摯な検証を行い、その教訓を生かすことは欠かせません」とあり、そして「戦後 60 年以上が経過し、関係する生存者の証言や当時の資料収集も困難になる中で、検証を進めることが急がれます。史実に基づく客観的な検証のため、医学者・医師はもとより、看護師等の医療関係者、歴史や生命倫理の研究者、法律家等との協力は欠かせません」と主張している。

そして、2012 年 11 月に京都で開かれたシンポジウムにおける「2012 年京都『戦争と医の倫理』の検証を進める宣言⁽⁷⁹⁾」には、次のような文言が含まれている。「かつての戦争時の資料の焼却、散逸と残された資料の「未公開」「隠蔽」の為に、戦争加担の全貌は未だ明らかではなく、検証は容易ではありません。731 部隊に関しては、当時日本を占領した GHQ (連合軍総司令部) は、関係した多くの医学者・医師に対する訊問をしましたが、その研究成果を得るために戦争医学犯罪を不問とする取引をしました」。

そして、最近のナチス・ドイツの医療のありかたを自己批判したドイツ精神医学精神療法神経学会 (2010 年 11 月) とドイツ医師会総会 (2012 年 5 月) を例にとり、「かつての戦争における日本の医学者・医師の非人道的行為について、史実を明らかにし、検証を進めることは、医の倫理の確立

(79) 同上, 114 頁。

やこれからの医学・医療のために不可欠です。その際、日本の医学会・医療界を代表する日本医学会、日本医師会や関わった学会・大学などが自らの問題として取り組むことは欠かせません」と主張している。医の倫理の問題としても、731 細菌戦部隊の史実を明らかにし、検証をすすめることが不可欠であるとしているのである。

しかしながら、731 部隊の史実を明らかにするためには、日本では障壁が特に高いという点は指摘しておかねばならない。アメリカでは戦後4回の調査がなされ、情報公開法を使ってそれらは読むことができる。イギリスでも同様に情報公開法を使って関連史料を入手できる。ソ連はハバロフスク裁判（1949年）の翌年、『ハバロフスク公判書類』が複数の外国語に訳され出版されたし、ソ連崩壊後はその裁判の基礎資料にもアクセスできるようになった。中国でも『細菌戦と毒ガス戦』（1989年）が刊行され、黒龍江省・吉林省檔案館の関連資料も公開された。このように米・英・ロ・中の諸国では、もちろん完全ではないがある程度の史料が公開されているのに対し、日本だけは史料を公開していないのである。

戦後、731 部隊幹部・医者⁽⁸⁰⁾の戦犯免責の代わりにアメリカが入手した資料について触れておこう。1986年9月17日、「第99回国会、下院、退役軍人問題委員会の補償、年金、保証に関する小委員会」の公聴会が、満州・奉天におけるアメリカ人捕虜に対する731 部隊による人体実験をめぐる告発に関して開かれた。その公聴会で、陸軍統括主任・陸軍文書官・ジョン・H・ハッチャーが、次のように証言した。「明らかに731 部隊が作成した実際の実験の実物、事例ファイル、医学的ファイル、諸記録」といった、「第2次世界大戦後 [アメリカが] 捕獲した日本の資料は現実に米国に運ばれ、首都に、主として国立公文書館の建物のなかに数年間保持されていたが、最終的には日本に箱詰めにして送り返された (finally boxed up and sent back to Japan)。なぜなら、言語の問題は我々には克服するのが非常に困難だったからである」。ハッチャーは、当小委員会に提出した文書のなかで、「日本の SCAP 占領下の間に獲得された1次資料は、……複写をつくらずに1950年代後半に日本に送り返した⁽⁸¹⁾」と書いている。そして質疑のなかで、マッカーサーに返したのかとのソロモン議員の質問に対し、「いいえ、我々は日本政府に返した⁽⁸²⁾」と答えている。

2011年初めから現在まで、「731・細菌戦の実態を明らかにする会」（代表・松村高夫）は、前出の『戦争と医の倫理』の検証を進める会」とともに、防衛省に返還されているはずの（ハッチャー証言の指摘する）関連資料の調査・公開を求め、これまで5回防衛省内で「意見交換会」を行なってきた

(80) *Treatment of American Prisoners of War, Manchuria, Hearing before the Subcommittee on Compensation, Pension and Insurance of the Committee of Veterans' Affairs, House of Representatives, Ninety-ninth Congress, Second Session, September 17, 1986, Serial No. 99-61, pp.8-9.*

(81) “they were repatriated in the late 1950’s to Japan without copies being retained” (*ibid.*, p.45).

(82) *Ibid.*, p.13.

た。防衛省側はハッチャー証言のいう資料は防衛省では確認できていない、との返答であり、最近
は「意見交換会」拒否の態度を示している⁽⁸³⁾。だが、これらの史料は公開されねばならない。そうで
ないと、731部隊と細菌戦の史実の全貌が明らかにならないからである。

医の倫理の問題は、医者個人の内面的な倫理観の問題としてだけではなく、その政治的・経済的・
社会的関連のなかでも捉えねばならない、と私は考えてる。そのためには731部隊・細菌戦につい
ても史実を明らかにし、検証をすすめることが不可欠である。

(名誉教授)

(83) 防衛省との「意見交換会」の経過については、松村高夫「防衛省交流をふりかえって——成果と残された課題」『731資料センター会報』1号、2011年9月を参照されたい。